

明末清初の中越関係：理想、現実、利益、実力

牛軍凱『王室後裔与叛乱者：
越南莫氏家族与中国関係研究』によせて¹

孫 来 臣

(訳・永木敦子)

(監訳・蓮田隆志)

《翻訳にあたって》

ここに訳出した、孫来臣「明末清初の中越関係：理想、現実、利益、実力」は牛軍凱『王室後裔与叛乱者：越南莫氏家族与中国関係研究』（広州：世界図書出版、2012）に「代序」として寄せられたものである。本論にもあるように、この書は牛軍凱氏の博士論文を改稿したものである。著者牛軍凱氏は1971年生まれで、現在、中国の中山大学で教鞭を執っているが、中国における中越関係史・東南アジア史研究の中核を担う研究者である。この書の文献目録を見ても、これまでの中国所蔵漢籍に依拠した「中外関係史」に留まることなく、ベトナムの漢喃史料も十二分に駆使していることが分かる。

牛氏の著書は、これまでいくつかの例外的業績はあったものの、体系的に論じてこれなかった高平（カオバンCao Bằng）莫氏の歴史および中国との関係を、中越双方の史料を駆使して解明した実証的著作である。特に明清の地方当局・土司と莫氏との交渉や、高平を追われた後の莫氏後裔の動向、彼らによる明朝再興運動を詳細に追跡・解明した点で、極めて大きな価値を有する大著である。

監訳者（蓮田）は当初、本書の書評執筆を考えていたが、本書に附せられた孫氏の代序が中国内外の研究動向を十二分に踏まえ、広い視点で本書を位置付ける好論であることから、むしろこちらを翻訳紹介の方が広く学界を裨益すると考えるようになった。著者、孫来臣氏の許諾を得て、ここに訳出する次第である。快諾下さり、訳出上の種々の疑問にも懇切にお答えいただいた孫氏に深く感謝申し上げます。読者は孫氏の博引旁証のみならず、書籍の序文としては異例の厳しい批判にも驚くであろう。しかし、それは牛氏の要請に真摯に応えた結果であり、本書の貢献も余すところ無く記している。なお、監訳者が本書について1つ要望を付け加えるならば、索引が備わっていないことである。本書は重厚な研究書であると同時に、高平莫氏研究および近世中越（越中）交渉史についての百科事典的性格も併せ持つので、工具書的な使われ方も想定される。別途、Web上で公開することなども検討して欲しい。

孫来臣（スン・ライチェン、Sun Laichen）氏は中国に生まれ、鄭州大学を卒業後、北京大学を経て米国に留学、北イリノイ大学で修士号を取得後にミシガン大学にて*Strange*

*Parallels*で一躍有名となったビルマ研究者ヴィクター・リーバーマンVictor Lieberman氏の薫陶を受けて博士号を取得し、現在はカリフォルニア州立大学フラートン校の準教授である。日本の京都大学東南アジア研究所にも長期滞在した経験があり、監訳者はその折に知遇を得ると共に、その学術に対する真摯な姿勢に深く感銘を受けた。専門はビルマ前近代史および中近世大陸部東南アジアにおける火器技術の移転、前近代中国・東南アジア関係史で、日本では「東部アジアにおける火器の時代：1390-1683」（中嶋楽章・訳、『九州大学東洋史論集』34、2006）で知られているだろう。母語である中国語、現住地で使用する英語、専門分野に関連するビルマ語を駆使するほか、前述の来日を契機として日本語にも手を染めるマルチリンガルかつ世界的視野を持った東南アジア史研究者である。世界の東南アジア史研究の潮流を中国国内に紹介することにも積極的で、アンソニー・リードAnthony Reidの*Southeast Asia in the Age of Commerce*の中国語訳で主導的役割を果たしたほか、近年、日本語を含めた世界の東南アジア前近代史研究の主要業績を中国語に翻訳するプロジェクトも立ち上げたとも聞いている。

翻訳にあたっては、永木敦子氏が作成した訳稿を、監訳者の蓮田が東南アジア史・ベトナム史に関する専門用語や漢籍の引用などを中心に修正・校閲し、併せて全体の統一を図るために用語や体裁の統一を行った。原史料の引用は概ね書き下しとしたが、著者が解釈を加えている『安南使事紀要』は原文を残し、末尾にある蘇軾の「稼説」および范文瀾のものと思われる警句は原文のみとした。この訳稿をきっかけに、牛氏や孫氏の著作を手取る人が増えて、その成果が広く共有され、この分野の研究がさらに進展することを期待している。言うまでもないが、何らかの誤訳があるのであれば、それは全て監訳者が責を負うべきものである。

（蓮田隆志）

はじめに

J・K・フェアバンク：「中国の対外関係（を研究する際）の最も重要な問題は、理想と現実、表向きの宣言と具体的な施策との間の関係をいかに明確にするかということだ。」²

呉士連：「南北の強弱は、各々その時を以てする。北方の弱きに当たれば則ち我は強く、北方強ければ則ち我またこれが為に弱し。天下の大勢なり。」³

私が牛軍凱を知ったのはまずその文章からだった。2003年に、彼が南明と安南との関係について書いた文章を読んだのだが、その時私はその文章がありきたりでなく、全て目新しいと感じた。2005年、中国国家図書館でまた牛軍凱の博士論文『朝貢与邦交－明末清初中越関係研究（1593-1702）』（中山大學、2003年）を読んだ時は、更に彼の基礎的知識が確かなものであると感じた。その後、国内の友人孫衍鋒や日本の僚友蓮田隆志からも、牛軍凱の学問

研究への意識や学術レベルについての賞賛を耳にした。2008年、南寧でついに牛軍凱と顔を合わせた。牛軍凱の、飾り気がなく真面目な人柄、学問を志す態度が深く印象に残った（同時に、我々が共に河南出身であり、鄭州大学歴史学系の卒業生でもあることを知った）。南寧で、博士論文を修正して本として出版する状況を牛軍凱に問うた際、まだまとまっておらず、なお時間が必要だときっぱりとした口調で彼が答えたことを覚えている。その時私は、早さは求めず質を重視する牛軍凱の姿勢を強く感じた。後に、北京大学の学者達が『東南亜古代史』を編輯する際、牛軍凱の参加を特に要請したことも知ったのだから、それは牛軍凱が、その本の編纂に北京大学以外から参加した唯一の研究者ということになり、このことから中国の東南アジア史学界が牛軍凱を重視していることが十分に伺えるであろう。国内では東南アジアの歴史を研究するものはますます少なくなり（多くが現状の研究へと転じてしまった）、そして前近代史を専攻するものはさらに稀である。大量の古い資料を読み、外国語（多数の人が用いる言語だけでは充分でなく、マイナーな言語も必要）を一生懸命やっても、成果を早く出すことも、多く出すこともできないからだ。こうした意味からいえば、牛軍凱は国宝ではないが、希有な人材といえるだろう。2年前、牛軍凱がフランスのパリへ1年間の研修に行くということを知り、私は非常に嬉しく思った。なぜなら、中国の東南アジア研究は世界との交流が必要だと長い間切実に感じていたからだ。

2011年4月、突然牛軍凱からのメールを受け取った。それは博士論文の修正稿で、その序文を私に依頼するものであった。そして彼は「真の学術的批評としての序文を望んでいる」ことを特に強調していた。牛軍凱の大著は専ら中越関係について語っているが、私はこの方面の専門家ではなく、ベトナム語も分からない。しかし牛軍凱の誠意に鑑みれば、無理を承知で引き受けるしかなかった。牛軍凱の大きな期待に背かぬために、牛軍凱の大著を繰り返し拝読するだけでなく、関係する著作を特に読んだり、改めて読み直したりしたが、その目的は「真の学術的批評」を書くことにあった。牛軍凱の大著を中心として、国外のいくつかの関連する著作も紹介し、あわせて私の中越関係史についての若干の意見も述べたいと思う。

I 選択したテーマの意義

牛軍凱の『王室后裔与叛乱者－越南莫氏家族与中国関係研究』（以下『王室後裔』と略称する）は、鄭永常『征戦與棄守－明代中越關係研究』（台南：「國立成功大學」出版組、1997）と、孫宏年『清代中越宗藩關係研究』（哈爾濱：黒龍江教育出版社、2006）に続く、中国大陸、香港台湾地域での中越関係史に関する力作である。この著作は、ベトナムの莫氏一族を主軸として、明末清初の中越関係の様々な方面について検討している。その中には、明清両朝が莫・黎政権に対して行った二重承認とその最終的な放棄、1592年以降の高平莫氏政権樹立の詳細な過程、南明王朝とベトナムの関係、1682年以降の莫氏後裔の王朝再興運動

の過程と清朝の対策、乾隆年間に安南の黄公纘が清朝に投降した過程、明清王朝の交替と中越の朝貢制度・儀礼の変化、そして国境地帯の土司・割拠勢力の中越関係への影響などが含まれる。ここでは五つの側面から『王室後裔』が選択したテーマの意味を検討することができるだろう。

第一に、『王室後裔』が選択したテーマは、中国の「朝貢モデル」の研究において直接的かつ重要な意義を有している、ということである。国内外の学者達が近代以前の中国と外国との関係を表わした呼称は非常に多く、「中華世界秩序 (Chinese World Order)」、「朝貢制度」、「朝貢関係」、「封貢体系／貢封体系」、「宗藩制度」、「天朝礼儀体制」、「華夷秩序」などを含む⁴。この序文で用いる「朝貢モデル (tributary model)」という語は、アメリカの学者バルダンツァ Kathlene Baldanzaが提起したものであるが、この語を用いた場合、その語義は広く漠然としたもの感じられるので、全体的な中外関係を総括する際に用いるのに比較的適していると思われる⁵。一方、ベトナムと中国との外交関係については、私は牛軍凱が用いている「朝貢関係」を選ぶ。

近代以前、中国と外国との往来の歴史は長く、状況は複雑で、アジア、アフリカ、ヨーロッパといった広大な地域の多くの国々に関わり、政治、経済、軍事、思想、文化、技術などにまで関連する。その内容や実体は、そのときどきの情勢やそれぞれの土地柄により異なるもので、フェアバンクを代表とする学者たちが20世紀中後期に行った創始的研究は氷山の一角にすぎない（その代表作が*The Chinese World Order*である）。その後、国内外の学者が異なった側面から多くの貴重な努力をし、目覚ましい成果が得られた⁶。しかし中外関係の評価については依然としてそれぞれ見解が異なり、物事の一面だけから全体について判断し、自分の意見を主張して譲らないといった感さもある。結局その主要な原因は、やはり前近代の中外関係は一つの巨大なプロジェクトだったということにある。その期間は長く、史料は多く、言語の種類は多い。そしてまた学者達の視点やイデオロギー（ナショナリズムも含む）もそれぞれ異なる。全ての期間について把握し、あらゆる言語の史料を追求し、総合的な研究、比較、総括をしようとすれば、この短期間では不可能なことであり、それをしようとすれば相当長い、一、二世紀の時間さえも必要となろう⁷。全海宗は、「もしも過去の韓国の歴史を正確に理解したいなら、韓中間の朝貢関係を徹底的に明らかにしなければならない。」⁸と指摘している。フェアバンクの門下生で、南カリフォルニア大学の教授だったジョン・ウィルズ John E. Wills, Jr.は、「私はこの問題（朝貢制度）について、四十年もの長きにわたって繰り返し考えてきた。しかしいまなおそれをきちんと整理できていない。」⁹と述べている。これは謙虚でもあり、事実でもあろう。彼を謙虚だというのは、ヨーロッパ人と朝貢体制との関係の研究において、ウィルズの成果は際立っているからである。そして事実だというのは、ヨーロッパ人は巨大な朝貢体制の中の一部にすぎないからである。私は、持続的で掘り下げた研究が物事の一面だけから全体を判断するような状況を次第に克服し、歴史的事実に可能な限り近づき、歴史の真相を復元すると信じている。

ベトナムと中国とは、長く特殊な関係にあるため、このような関係を研究するには中国の朝貢モデルについての理解がきわめて重要である。確かに歴史上の中越関係は、長期にわたり比較的強い関心もたれ研究もされてきたが、比較研究が足りなかったため、全体的な朝貢モデルの中でのベトナムの位置が特に明確になっているとはいえない。例えば庄国土は、明清時期の中朝関係だけが実質の意味での宗藩関係を有していた、そして古代の中国と東南アジアの朝貢関係の最も主要な原動力は貿易で、いわゆる「朝貢制度」は幻で、「中国統治者の驕慢な心理を満たすための自己満足」であり、その中のベトナムと中国の外交関係も例外ではない（ただ元朝初期の中越関係だけは本当の「宗藩関係」であった）、としている¹⁰。私は以前、主にミャンマーから中国を見たが、やはり朝貢「制度」の存在は見いだせなかった。これらのことは中越関係史の研究に更に高い要求を提示しているが、『王室後裔』は、まさにこの類の問題に答えることができるものであろう。

また、『王室後裔』が注目している時期は、中国の朝貢体制の研究に新たな内容を注ぎ込んだ。明末清初の中越関係は、中国とその他との関係の中では稀に見る特殊性を有している。つまり中国からいえば、向かい合うのはある一国のただ一つの政府ではなく、二つ更には二つ以上の政府だったということである。このことが中国の外交政策に、新たな情勢に合わせて新しい対策をとることを要求した。このような状況は、明末清初の中越関係の中で一世紀半（1527-1677年）、ひいては更に長く（1788年にベトナムの南北分裂の状況が最終的に終結するまで）続いたが、これは中越関係史の中で稀だというだけでなく、中国とその他の国との関係においても、これまで起きたことがなかったか、あるいはあっても非常に少なかったことだといえる。このことから、この中国外交上の特殊な現象は当然研究するに値し、示される結論は言うまでもなく中国の朝貢モデルの理論と現実に重大な意義を持つものとなるだろう。

第二に、ベトナム史と中越関係について、『王室後裔』が選択したテーマ自体、非常に重大な学術的意義を有しており、更にそれは空白を埋める作品だということである。16世紀初頭、莫登庸が建てた莫朝（1527-1592年）はその非正統性、あるいは「偽朝」という位置づけから、長い間ベトナムの歴史研究の中では立ち入り禁止区域となっていた。その結果、ベトナム内外でのこの方面に関する研究は、1980年代以前はほぼ空白となってしまう、アメリカの学者ウィットモアと日本の学者大沢一雄が、1960-70年代に発表した莫朝および莫朝と中国との関係に関する文章が数少ない例外となった¹¹。20世紀末から、ようやくベトナムの学者がわずかばかり研究に携わりはじめ、そして2003年、ディン・カック・トゥアン Đinh Khắc Thuậnがフランスのパリで執筆した博士論文が、この方面での重要な研究成果となった¹²。中国では、莫朝の歴史に一部の学者がすでに興味をもち、2篇の修士論文が書かれている¹³。アメリカでは、莫朝および莫朝と中国との関係について、最近になってようやく学者が興味をもち始め、2010年に続けて2篇の博士論文を完成させた¹⁴。これら全ての論著は程度の差はあれ、1527-1592年の莫朝をテーマとしているが、莫氏が政権を失った後、ベト

ナム北部の高平地区に建てた地方政権およびその政権と中国との関係についての歴史にはなお言及していない。目下、中・莫関係の研究は、史料の利用や議論の実証性の面でも、また研究についての広さや深さの面でも欠けている部分が多くあるため、早急にレベルアップすべき余地が存在する。そして『王室後裔』は、まさにその欠けた部分を補う作だということができよう。

第三に、東南アジア史研究の側面では、『王室後裔』という一冊の出版で、東南アジアの歴史の発展に国内外の要因がいかに影響を及ぼしたかという議論に加わることができる。海外の東南アジア研究は、長い間、国内と国外二つの要因のどちらが大きくどちらが小さいかという問題をめぐって議論が繰り返されてきた。両派の学者の勢力は見たところほぼ拮抗しているものの、総体的にみれば「外因派」がいくらか優勢を保っている。簡単にいえば、両派の論争の軌跡は、まず外因派（ヨーロッパ中心派）が東南アジア研究に先鞭をつけ、その後、内因派（自律史観派）が外因派を徹底的に覆したが、再び学界では外因を肯定しつつ、しかし内因も排除しないとなった¹⁵。

何度かの論争を経た後、東南アジアの海の道の歴史の発展についていえば、外因派の視点が、より歴史的事実に近いように思われる。前者はオランダ、フランス、イギリスの帝国主義的歴史学者を代表とするもので、ヨーロッパ人がその卓越した組織力、技術、精神を頼みに東南アジアの水域に進入することから始め、そして東南アジアの歴史の発展に革命的な影響を及ぼしたと強調する。一方、セデスGeorge Coedes、ファン・ルールJ. C. van Leur、シュリーケB. J. O. Schrieke、スマイルJohn Smailを代表とする自律派は¹⁶、19世紀早期までヨーロッパの影響は非常に浅く限定的で、地方の文化や経済の動きはほぼ影響を受けなかったと考えた。現在、島嶼地域の専門家達も同意を示しており、ポルトガル人の影響は非常に限定的だったが、1700年前後になるとオランダ人が東南アジアの島嶼地域に非常に大きな影響を与え、その経済、政治、そして文化や生活にさえもきわめて大きな変化をもたらしたとした¹⁷。

ベトナムへと転じると、近代以前のベトナムは、結局のところ「東アジア」に属すのか、それとも「東南アジア」に属すのか、というこの西洋学術界で長く論争されてきた問題を焦点として、リーバーマンが中国の影響をよりいっそう強調した。彼は、ベトナム人の自我意識の形成にとって、中国と互いに影響し合うことの方が、チャンパ、クメール（カンボジア）、シャム（タイ）との戦争よりも重要であった、そして15世紀の宋明理学革命を経た後、特に上層社会（しかし上層社会に限ったことでもない）の宗教信仰と社会組織に中国の様式が取り入れられた、と指摘した¹⁸。

過去十年間の中国と東南アジアとの関係史に関する国際的な著作を見ると、中国の影響がますます重視され強調されている。2002年には、早くもベトナムとインドシナの現代史を専門に研究するゴシャChristopher Goschaが、アメリカアジア研究学会（AAS）の年次総会で、“Foreign military transfers in mainland Southeast Asian wars: Adaptations, rejections and

change”と題するパネルを企画した。翌年には、会議での3篇の論文がシンガポール国立大学の*Journal of Southeast Asian Studies*に発表された¹⁹。ゴシヤはその序文の中で、西洋の植民統治が終結した後、東南アジアの民族主義者は過去の歴史を再建する過程で、自国の要因や国粋を強調することを重視し、外国や外来の要因を低く評価あるいは否定していると述べている。彼は具体的に描写して、これらの民族主義者は、「現代の民族国家のように、東南アジアの魂の形成は全てその内在的な特徴によって決まっており、中国や西洋など外来の影響という汚れは受けなかった……」とするが、実際は、「いかなる国や地域も真空の中に置かれているわけではなく、彼らの過去も同様に外界から孤立隔絶してはいなかった。東南アジア地域の内在的関係については、縦横に交錯している陸路海路の中で占めるその中心的位置、そしてその鮮明な社会文化の多様性や活力、それらすべてが東南アジアの国や地域が孤立隔絶していたという見解を支持していない。そして外国の軍事の知識や技術が、大陸部東南アジアまで伝わった由来を探り理解することにまで及べば、なおさらであろう」²⁰と述べている。そしてこの3篇の論文の主旨はまさに、14-20世紀の間に外国（中国、フランス、日本）の軍事技術が、大陸部東南アジア地域の歴史発展に重大な影響を及ぼしたことを示すことにあった。

2010年に出版された*Southeast Asia in the 15th Century: The China Factor*は、実際上は明朝初期に中国が東南アジア地域（一部の華南地域、特に広西と雲南をも含む）に与えた影響について専ら検討している。2篇の序文および12篇の論文は異なった角度から、東南アジアの大陸部と島嶼地域について深く掘り下げて研究し、東南アジアへの中国の重要性がありありと描かれている²¹。2011年に出版された2冊の新刊書も、程度は異なるが中国の東南アジアへの影響について言及している。1冊は*Chinese Circulations: Capital, Commodities, and Networks in Southeast Asia*で、時間の幅が先に挙げた著作より長い。主に近現代の中国の技術・商人・資本・労働が東南アジアに与えた大きな影響について検討している。編者2名は序文の中で中国の影響というテーマを特に強調しているわけではないが、この本のために序文を書いたワン・グン・ウー（Wang Gungwu 王賡武）は、東南アジアと中国との間の大量の商品の流通が、「中国人の（東南アジア）現地の経済発展の中での役割を、重要で欠くことができないものへと変化」²²させた、と指摘している。

もう1冊は、*New Perspectives on the History and Historiography of Southeast Asia: Cotinuing Explorations*（Edited by Michael Aung-Thwin and Kenneth R. Hall, Abingdon, Oxon: Routledge, 2011）と題するものである。2名の編者の内の1人アウン=トゥインMichael Aung-Thwinは「自律史観」の代表的な後継者であり実践者だが、一貫して東南アジアの歴史発展の中での現地の要因を強調している。20年近く前に、私は北イリノイ大学で彼が開講していた授業（後に彼はハワイ大学で教鞭をとった）を選択したが、彼はまず学生にスマイルとベンダHarry Bendaの「自律史観」に関する著作を読むことを求めた。アウン=トゥインとホールKenneth R. Hallは、この本に共同で書いた序文の中で、「我々のうちの多くの者

が、現在、すでにこの問題についての我々の以前の立場を修正し、またインドと中国の二大文明が東南アジアの文化に与えた影響の深さと広さを認めている。」と指摘している。また彼らは、地方化（ローカライゼーション、localization）の観点は概ね今なお主導権を握っている（この観点はもちろん検討に値する）が、この本に収録されている何篇かのベトナムに関する文章は、近世時期の中国の東南アジアへの影響が比較的強調されている²³、と指摘している。「自律史観」の影響を受けて、ベトナムの歴史研究には、ベトナム側に肩入れし、特別扱いする（privilege）というある種の傾向が存在するが、最近、ケリー・リアムLiam C. Kelleyの著書では、このような傾向に必要な是正が行われている²⁴。一貫して東南アジア地域の歴史の独自性を強調したウィットモアであっても、中国の影響を過小評価してはいない。例えば、彼は以前に、明朝が15世紀初めにベトナムに侵入し占領したことで、宋明理学がベトナムに根付き発展するための道がつけられ、ベトナムが中国明朝のモデルを受け入れる結果となったのであり、その影響は画期的な意義を有していた、と指摘していた²⁵。最近、彼は再び深く考えさせる提議をしている。それは、宋朝の海外貿易は勢いがあるが影響力が大きく、労働力、技術、思想文化の各方面から、地の利を有していたベトナムに非常に大きな活力を注ぎ込んだ。その結果11-13世紀に、ベトナム北部沿岸地域に、李朝の首都（昇龍、現在のハノイ）地域既存の（寺院）経済や（佛教）文化とは異なった、新経済（宋朝の国際貿易により生み出された市場経済）、新文化（中国古典文化）そして新王朝（陳朝）が生み出された。陳朝の祖先は福建の出身で、ベトナム沿海地域で漁を生業としていたが、宋朝の貿易によって陳氏一族が経済的に台頭し、また文化面では中国からの新文化を吸収し、最終的に1225年に李朝に取って代わったと言うものである。一言でいえば、ベトナムでの李・陳交替期の新経済、新文化、そして新王朝全てが宋朝中国の海外貿易の大きな波によるものであったというものである²⁶。ウィットモアは、その特別な見識と視点、深い歴史的感覚、そして核心をつき深く考えさせる分析によって、中国が東南アジアの歴史発展に与えた重大な影響を生き生きと再現してみせている。

中国の影響は、ベトナム人にとって追い払っても去っていかない「中国の亡霊 (the Ghost of China)」である。文化面からいえば、ベトナムが1954年に独立し、その後の脱植民地化の過程で、ベトナム人は中国文化の存在と影響を無視しようがなかった。それは中国がまさに、いわゆる純粋なベトナム文化の根源だからである。そのため、ベトナムの学者は「脱中国化」、あるいは中国文化から離れる過程に極度の苦痛を感じる。それは多くの状況下で、中国との文化的結びつきを断ち切ることは、ベトナムの歴史を切り離すことに等しいからである²⁷。チャン・チョン・キムTrần Trọng Kimは20世紀の初めに早くも、「(中国文明の)このような影響は長い年月を経る間に、既に(ベトナム人)自身の国粋となっており、たとえ今日それを明白にしたいと思っても、直ちに残さず一掃することは難しい。」²⁸と鋭い指摘をしている。この点に鑑みれば、ベトナムの歴史を研究する際、中国の影響を見過ごす、あるいは過小評価したならば、曖昧模糊としたものになってしまうだろう。中国のベトナムへ

の大きな影響は、近代以前に見られるだけでなく、現代も同様である。テイラーKeith W. Taylorは、「たとえ20世紀のベトナムが、文化や政治の面で、向きを新たに調整し、「今より前の」中国「モデル」から大きく離れたとしても、中国のベトナムへの影響は、とるに足りないものには永遠にならないだろう。フランス人が来て去り、日本人が来て去り、アメリカ人が来て去り、ソ連人も来て去った。しかし中国だけはずっと離れていかず、そして永遠に離れていくことはないだろう。」²⁹と、かつて述べたことがある。目下、中国の興隆により、ベトナムの政治、経済、文化面に生じた影響、そして南シナ海での中国とベトナム（そしてフィリピン）との紛争は、中国という要素がベトナムにとって重要であることを更にくっきりと浮かび上がらせている。

第四に、『王室後裔』（および鄭永常、孫宏年、パルダンツァの著作）は、中越関係についての、戦争、戦争、また戦争という長年の型どおりの印象を是正したということである。民族主義的思潮の影響下、また20世紀に再び不幸にもベトナムが30年もの長きにわたる戦争（1946-1975）に巻き込まれたことで、歴史上の中越間の戦争は歴史研究の重点となったが、ベトナム内外のベトナム史研究も「戦争」の影に覆われてしまった。そうして、外国の軍事侵略への抵抗を際立たせることが、ベトナムの歴史にとって2つの大きなテーマの内の1つになった³⁰。注意しなければならないのは、近年のアメリカの学術界における、ベトナムの中国への姿勢という問題に焦点を合わせた変化である。アメリカの一部の学者の間で、中越間の戦争と中国に対するベトナム人の姿勢についての見解に程度の差はあれ変化が現れている。以前の「外部（中国）からの侵略への抵抗」がベトナムの歴史の基調の一つであるという見方から、中国とベトナムの間には緊張関係や戦争ばかりでなく長い平和的な交流があった、戦争は例外に過ぎず平和こそが基本であった、ベトナム人の間の内戦の数は、彼らが外部の侵略に抵抗し反撃した戦争の数を大きく超えている³¹、というように変化している。

これまでのところ、このような変化は喜ぶべきことであろう。なぜならこの新たな見解は歴史的事実により近いからである。しかし、このような見解の変化には、度を越す傾向も存在する。例えば、「20世紀以前、ベトナムのほとんど全ての衝突はベトナム人がベトナム人と対立したもので、外部からの敵に抵抗したものではない。ホー・チ・ミンとこれ以前のベトナム人は中国人を憎んではおらず、事実上彼らは中国の盟友と友好的に協力しあっていた。」³²といったものである。中越間の戦争は歴史的事実だが、決して中越関係の基調ではなく、更に多くの時間は朝貢関係の下での平和的な交流があり、その中には使節の往来、境界の摩擦や交渉だけでなく、文化や経済の交流なども含まれるということは否定できない。

第五に、史学史の角度から見れば、『王室後裔』が特に力を入れて論述している外交史（すなわち中国国内で一般的に言うところの「関係史」）は、独自の道を切り開いているわけではないが、長い時間を経ても新しさに満ちているということである。19世紀に専従の歴史学者がドイツで誕生した初期から第二次世界大戦まで、政治史（外交史を含む）が歴史学者の寵児であり、歴史研究は政治史一色になった。この潮流の反動として、1929年、フランスの

アナル学派が機運に乗じてあらわれ、「全体史」の構築を目的として歴史学とその他の分野（社会学、人類学、地理学など）とが連携することを強く提唱した。第二次世界大戦後、特に1960年代、アナル学派の著作が英語に翻訳されるに伴い、アナル学派の名声は一気に高まり、その著作も評判となり瞬く間に広まった。しかし完璧な学派がないように、アナル学派も様々な批判を受けた。その中の一つが、政治史の軽視である（度を越した、ということだろう）。もしも政治史だけならば、歴史は当然単調で味気なく、狭隘で一面的に見えるだろう。しかし政治史がなければ、歴史はまた大きく一部を欠き、いわゆる「全体史」も不完全なものになるだろう。真に全体的な歴史を構築しようとするならば、各種の歴史を欠くことはできないということである。

一方中国では、特に東南アジア研究においては、政治史、外交史・関係史がこれまで粗略に扱われたことはない。その意味からいえば、中越関係史に力を注いでいる『王室後裔』は伝統を受け継いだものといえる。全体的なベトナム史を構築するには、ベトナムの対外関係史を欠くことはできない。そしてベトナムと中国との関係は、近代以前においてはさらに極めて重要で、代わりになるものはない。ベトナム史や中越関係史には、開拓が待たれる領域（例えば、女性史・ジェンダー史、環境史、技術史）が多くあるが、中越両国の歴史的関係が（特にベトナムにとって）極めて重要であることを前提とすると、中越間の政治関係史あるいは外交史（およびその延長にある文化的結びつき）は永遠のテーマであるといっても過言ではないだろう。それゆえ、牛軍凱の「中越間の朝貢関係、中越間の衝突と戦争は、再び学術上注目される焦点にはならない」という考えは、完全に正しいというわけではなく、先に示したバルダンツァヤブットーリ（Brian Zottoli）の博士論文が、欧米諸国の学術界も中越朝貢関係に注目し、興味をもっているということを証明している。この他にも更に多くの学者が、中越の陸路による境界の往来に注目している³³。特に指摘しなければならないのは、歴史上の朝貢関係が、現代の現実的問題に注目する政治学者たちにとって旨い肴となっていることである。ウォーマック Brantly Womack は歴史上の中越関係から考え、非常に影響力のある「非対称関係」の概念を提唱し、カン David Kang は歴史学者たちの研究を利用して、中国を中心とした明清時代の東アジア秩序について総括しているが、その目的は、歴史を鑑とし、未来の東アジアの国際秩序を展望することにある³⁴。このことからみれば、朝貢関係は決して重要でないものではなく、鋭い眼差しで、ある程度の高さに立って掘り起こす必要がある、非常に意義の大きい課題である。

II 『王室後裔』の重要な貢献

牛軍凱が十年間積み重ねた成果はきわめて真摯な研究態度と緻密な研究方法で、莫氏王朝後裔と中国との200年近い関係を新たに構築しなおした。そしてベトナム史、中越関係史、アジアの朝貢制度史、そして東南アジア史研究における空白部分を埋め、史料の運用、実証

性などの面で非常に大きな進展をみせている。これは中国の東南アジア歴史研究の領域ではまだ稀なことであり、三つの才（史才、史学、史識）すべて秀でた力作である。

『王室後裔』の最大の貢献は、アジアの朝貢制度（モデル）史の理論への貢献にある。中国前近代の朝貢制度には、長年国内外の学者が強い関心を寄せてきた。そのためこの方面の研究も次々に現れたが、この「朝貢制度」が存在するか否かについては、それぞれ見解が異なっている。中には、このような制度はもともと存在せず、いわゆる「朝貢制度」は幻に過ぎず虚構であるとする学者もいるほどである。『王室後裔』は、中越の朝貢関係についての個別の事例研究を通して、朝貢制度の存在を肯定したが、また同時にこのような制度の柔軟性と現実主義（つまり牛軍凱が言うところの理想と現実の結合）をも明らかにした。本書では、華南（両広と雲南）の地方官吏が、中越の現実的で複雑に錯綜した朝貢関係の中で果たした重要な役割（特に両広の総督陳大科と左江道副使楊寅秋の「黎を拒まず、莫を棄てず」政策の提唱とその徹底的な実行）について、かなり深い関心を寄せている。また中国の明清両朝が、特別な状況下でベトナム王朝に対して執った「二重承認」についても重点的に研究を行っている。そのようにして、フェアバンクが構築した、中央に着目し、朝貢儀礼を強調し、連続性を重視するだけの一定不変な「中華世界秩序」を修正することで、朝貢制度がより多彩で、活力に満ち、柔軟に変化するものであった事を示した。ベトナム史と東南アジア史の視点から考えて、本書は中国の、ベトナムや東南アジアの歴史における重要な役割や陸路（両広と雲南）から生じた大きな影響を明らかにし、中国がただ海路からのみ東南アジアの歴史発展に影響を与えたとその一面だけを強調するような「海洋志向」（Maritime Mentality）³⁵を正した。ベトナムの歴史上、朝貢の経路は一貫して陸路で、広西から中国に入り、途中内地の数省を経て中国の首都に到着していた。1829年、ベトナム阮朝の海路を経て入貢したいという要望は、清王朝から慣例に合わないということで受入れられなかった³⁶。

『王室後裔』のもう一つの顕著な特徴であり際立ったところは、史料をかつて例がないほど保有し把握していることである。中国とベトナムの著作、そしていくつかのイギリス、フランス、日本の著作といった大量の二次文献を引用しているだけでなく、著者は十年もの時間を費やして、中国・ベトナム・フランスで広く史料を収集し、中文の古典籍74種、ベトナムの漢喃古典籍113種を引用している。本書を繰り返し読むと、引用した史料が極めて詳細正確であり、文章全てに確かな根拠があり、そして作者の、冷遇を受けようとも、水滴が石を穿つ如くとことん突き詰め絶えず進歩を求める学問研究の精神が紙上にありありと現れているのを強烈に感じる。

『王室後裔』は他の論点にも際立ったものがある。もしも大量の史料だけあっても、緻密で先人を超える他とは違った論述がなければ、いかなる著作も史料の堆積と単調な叙述へと流れてしまうだろう。しかし本書は、先人の観点を吸収した基礎の上に、更にそれを超えていくつかの見解に対して力強い反論をし、また独自の感心させられる論述を展開している。例えば作者は、日本や中国国内の一部の学者が、明朝が莫氏の高平政権樹立を助けたのはべ

トナムの国内勢力を分裂させるため（「諸侯を衆建し、以てその力を分かちつ」）だったとするような見解には付会せず、史料に語らせ、明朝の基本政策は「夷を以て夷を治める」であって、「夷を以て夷を制す」ではなく、莫氏の高平占拠を支持したのは貢臣を守るためであったとの結論を導き出している。この見解を読んですぐの時点では、私は承服しかねた。なぜなら「分かちてこれを治む」が中国各王朝が常に用いていた統治手法であり、さらに明朝は15世紀の「三征麓川」の後にこの方法を用い、雲南、ミャンマーの国境地域のタイ・シャン民族の政体を分裂させたと考えていたからである。私は明清両朝のベトナムでの問題も例外ではないだろうと考えた。そこでかなりの時間をかけてこの方面に関する一次、二次史料を読んで調べた。その結果、作者の論点の論拠はきわめて確かであり揺るぎないものであることに気付いた。明朝の官吏のその後の「これ（莫氏）を留めて、黎酋を牽制す」という論述も一部あるが、明清両朝が行ったベトナムの莫黎政権への「二重承認」の主導的な考えは、やはり貢臣を守ることであった。まさに潘煥注が李仙根の言葉を伝えているように、「貢臣難有らば、朝廷は極むべからず」³⁷ということである。

この論点を支持する最も有力な傍証は、17世紀後半期、高平政権が最終的に滅亡し、明清によるほぼ百年にわたる莫黎二重承認政策も最終的に終結した後、18世紀に阮氏広南政権が2度清朝に冊封をもとめた称号を求めたが、清朝はいずれも「却して許さず」としたことである。もしも「諸侯を衆建し、以てその力を分かちつ」という論理に従ったならば、清朝は「二重承認」の機会を再び利用してベトナムの北黎と南阮の勢力と実力を削ぐことができたのではないだろうか？しかし実際そうはしなかった。詳しく調べてみると、中国の「分かちてこれを治む」という政策は国の内と外で違いがあった。もし中国国内の勢力（国境地帯の土司を含む）ならば、中央政府はいかなる勢力も強大になることを決して許すはずはなく、「諸侯を衆建し、以てその力を分かちつ」の原則に基づいて、あらゆる勢力を分裂させただろう。しかし、ベトナムは結局のところ外国なので³⁸、状況は自ずと異なってくる。更に牛軍凱の論述によれば、阮氏広南政権は、中国が認める条件を構成してはなかった、つまりベトナムを統治していた実力者でもなければ、もとの貢臣でもなかったのである。

また別の例として、ベトナムの中国への朝貢には、一体どこにメリットがあったのかという問題がある。中国には一貫して「厚往薄来」、つまり授ける物品の価値は献上品のそれよりも高くなければならないという原則があったが、ベトナムの学者は、中国は朝貢貿易で利益を得ていると考えていた。牛軍凱は熱心に研究し、明清両朝が確かに「厚往薄来」の原則を実行していたことを確認し（孫宏年の著作でも119-142頁で同様の結論に至っている）、また、さらにその他の費用（特に接待費）を加えれば、中越両国に経済上の利益はなく、朝貢は完全に政治的活動であって中国側は主としてベトナム側の「慇懃」な態度、つまり政治上の服従を必要としたとの結論に至った。この結論はおおむね成り立つだろう。牛軍凱が指摘する、明末清初に安南政権（後期黎朝と高平莫氏）が自ら朝貢回数を減らすことを提案したという点が、経済的な利益が問題の根本的な原因ではなかったということを証明するはずである。

中国側からいえば、清朝の使節李仙根が1669年に安南国王に宛てた手紙の中で「所謂進貢なるものは、豈に貴国を貪り財物を制し、以て太倉の一粟を足益せんとするを謂わんか？恭敬幣帛し、以て敢えて辺疆に事を生ぜしめざらんことを明らかにするに過ぎざるのみ。」³⁹と、すではっきりと述べている。ここから分かるのは、中国が朝貢を求めた意図は、やはり「安辺」にあったということである。牛軍凱が、安南政府が朝貢以外に行っていた貿易活動を見出していないことについては、それは明末清初の状況だけで、全ての中越関係のあらゆる段階を概括できるわけではないのは当然である。例えば、18世紀後半期、安南の黎朝と西山朝が中国に派遣した使節団は、政府に絹織物と蟒袍（大臣の礼服）を購入しているし（1772年の1回だけで、安南側は銀四万余両を費やしており、大量に購入したことがわかる）、また阮朝の朝貢船が1803年に広東から帰国した際、絹を一万余匹購入したが、これは通例の数倍上回っていた。つまりこれらは典型的な国家の貿易行為であったということである⁴⁰。

この他に、『王室後裔』は次のような観点を提示している。つまりベトナムでは、ある政治的な一族が国内で合法的に政治上の地位を手に入れようとするならば、通常、以下の五つのことをやり遂げる必要がある。一、政治支配権を獲得する、二、中国の承認を得る、三、科挙を行う、四、廟を建てる、五、貨幣を鑄造する、である。このような総括は、かなり高度で極めて大きいヒントを与えてくれるもので、我々がベトナムの歴史発展を理解する上で多いに助けとなるだろう。ベトナムが独立して以降の各王朝をみれば、程度の差はあれ、すべてこの五つの事を行っている。中でも中国側の承認を得るということは、中国がベトナムの政治的発展に重要な影響を及ぼしていたことを十分に説明しているであろう。

『王室後裔』はまた、高平莫氏政権の家系についても詳細な考証を行い、これまで一般的に広まっていた三代の家系について重要な修正を加えている。ベトナム史学界は『大越史記全書』をもとに、高平の系譜を三代としている。つまり莫敬恭（1593-1621年）、莫敬寛（1621-1638年）、莫敬宇（1638-1677年）である。中国の学者もほとんどこの説に追随している。牛軍凱は真剣に史料の整理を行い、その完全な系譜は以下の通りであるべきだとした。莫敬用（1593-1598年）、莫敬恭（1598-1625年、年号は乾統。1623-1625年、太上皇）、莫敬寛（1618-1638年、年号は隆泰。1625-1638年、太尉通国公）、莫敬完（すなわち莫敬耀、1638-1661年、年号は順徳）、莫敬宇（すなわち莫元清、莫敬瑞。1661-1680年、年号は永昌）、莫敬光（1681-1683年）。これもまた、牛軍凱のベトナム史への大きな貢献の一つといえよう。明朝末期、莫氏の莫敬用あるいは莫敬恭に「高平令」の称号を授けたか否かという問題については、牛軍凱は様々な中国史料の記載を比較して、「高平令」は架空であり誤りの出どころは後世の学者たちの文献の誤読であったとの結論に至っている。

高平莫氏政権が成立し得たことについて『王室後裔』では、ベトナムの学者が主な原因を結局は明朝の保護としていることには賛同せず、ベトナムの国内要素が決定的な作用を及ぼしており明朝の保護は客観的には補助的役割を果たしたにすぎないと考えた（ベトナムの国内情勢という「内因」と清朝の保護という「外因」が相互作用したことによって、高平莫氏

政権は存在しえた、というのが客観的なところであろう。1669年の清朝による干渉（李仙根はこのときにベトナムへの使者となった）は確かに重要で、これによって莫氏は1677年まで余喘を保ったように見える。しかしながら同時に、1669年には鄭阮戦争はまだ継続中だったことを抑えておく必要がある。（鄭阮戦争が事実上の休戦となった）1672年以降、鄭主はやっと「高平莫氏問題」の解決に全力を振り向けられるようになったのだ⁴¹）。莫氏は高平に退いた後も、なお疑いなくある程度の実力と人心を擁し、また高平の地理や地形（山が多く攻めづらいこと）もある程度の役割を果たしていた。そのため、中興後の黎朝が1630、40年代に十数回高平に進攻し、莫氏の残党を除こうとしたが、結局は思い通りにならなかった。このように内因、外因両面を考慮する上で、多角的に問題をみる思考上の筋道と方法は非常に見習うべきであろう⁴²。しかしこの問題についてはまだ深く検討する余地がある。莫氏が高平を占拠し、半世紀余りかろうじて生き長らえることができたのは、政治上の原因に加えて、経済、軍事技術、そしてベトナム国内の政治構造からも検討することができるだろう。試みとして以下のように分析してみた。

第一に、莫氏の政治的基盤以外、その経済的支柱は何であったか？農業、貿易（外国貿易を含む）、鉱業などの税収状況はどのようであったか？史料に限りがありこの方面の状況ははっきり分かっていないが、更に検討を進めるべきであることは疑いない。我々は少なくとも、莫氏が必死に土地を拡大したのは税収を増やす意図があったからだということは分かる。例えば、徐霞客の記述によれば、1530年代に莫氏は帰順州の領土半分を占拠し、「歳入・征利は休まず」⁴³という状況だった。徐霞客よりやや早い時期の劉文征（おおよそ1625年に『滇志』を完成させた）は、「（鎮安）州の南、交趾寨あり、莫氏以これを官監し、鎮安の酋長岑氏は半ばこれに服役し、毎年氈毳数十領を納め以て賦税に当つ」とやや詳細な状況をさらに提供している。莫氏が財源を開拓していたということはここからその一端がうかがえるだろう。この他、史料は少ないが、莫氏の貿易からの税源も軽視すべきではないだろう。高平の首府から一日ほどの距離にある帰順州は、「商賈の湊集すること、中州のごとし」で、中越国境地域の貿易が繁栄していたことが分かる。高平莫氏のこの方面に関する史料はなお不足しているが、彼らが積極的に貿易に従事し財源を増やしていたことは想像に難くない。明末清初の高平の農業に関して、私はまだ文献の記載を目にしていないが、高平に隣接する下雷州の「稲田は両熟す」、そして鎮安州の安得の「良田美池あり、一年の収穫は常に兩三年を支うるに足る」からみれば、比較的発達していたはずである⁴⁴。潘輝注の『歷朝憲章類誌』では、「（高平）轄内十二処、利源充羨す」と明確に指摘しており、高平の資源は豊富で、かなり充実した経済的基盤を有していたことが分かる⁴⁵。そして1886-1887年に出版された『同慶地輿誌』は、高平省の農業、鉱業（金・銀・鉛・鉄・錫）、手工業（陶器・竹製の器）などについて詳しく記載しており、明末清初に関する直接的な史料ではないが、その経済的基盤の一端を見ることができ、同時に潘輝注の「利源充羨」という見解をも裏付けている。例えば、「土民……以耕農為業；……農民……亦只耕農……」で、さらに水車も使用し、「力

を用いること少くして效の常に多きを得。」とあって農業の重要性を十分に反映している⁴⁶。その詳しい状況は、さらに掘り起こし復元する必要があるだろう。

第二に、莫氏の軍事力はどうかであったか？史料はやはり非常に少ないが、政治的に生き残るため莫氏が一貫して軍事力を非常に重視したであろうことは想像できる。莫氏は武力によって政権を奪い、統治を維持するために当然軍事を重視し発展させた⁴⁷。火器の時代に存在するいかなる政治勢力も、火器の威力を無視したり火器の利用を軽視するはずはない。莫氏も当然、例外というわけではない。1530年代後期、莫登庸は明朝がおそらく始めるだろう征討に対処するため、「水戦を教練し、巨艦を造り、人を募りて佛即（郎）機銃を鑄」た⁴⁸。これは、明朝の中央政府が1524年に模倣して作りはじめたときから十年ほどしか隔たっておらず⁴⁹、ベトナムがかなり早くこのヨーロッパの先進的な火器技術を受け入れたことを説明している。中国の史籍にあるこの記載はベトナムが西洋の火器を使用したことについての最も早い史料であり、西洋の火器がベトナムの政治や軍事の活動に非常に大きな影響を及ぼすであろうことを予告していた。上述の「人を募り」によってフランキ砲を鑄造するということは、ベトナム人自身はまだこの技術をマスターしておらず、募集した職人はおそらくマカオから来たポルトガル人であろうことを説明していると思われるが、中国人だった可能性もある（「佛郎機（フランキ）」はポルトガルの大砲の中国名である）。ベトナムの史籍の記載では、1592年、黎朝との戦闘で莫氏の軍隊は「大銃百子火器」を擁していた。これはベトナムの軍隊に火器が普及していたことをさらに説明している（1593年、黎朝の軍隊も「火器大銃」を使用し、莫氏の隊を射殺している）。1637年、徐霞客は中越国境の一带で、莫氏の軍隊の装備が優れていることを聞き、「莫夷はただ鳥銃甚だ利にして、人ごとに一枚を挟み、発すれば中らざるはなし、しかれども器械なれば則ち幾ばくも無し」と述べている。徐霞客はまた、帰順州と田州との戦いで、莫氏が前者を支持し、「大兵象陣（兵万余人、象は三頭のみ）」を派遣して支援した⁵⁰、と述べている。莫氏が1559年にまず清朝に降伏し、1661年に再び朝貢した際、南明政府が与えた偽印、抄敕を上納した以外に、献上品の中には、交銃一つ、交銃四門、交槍四件、小槍四件、交劍二件、交布二件、そして偃月（刀）二件も含まれていた⁵¹。安南国王黎維楨の1680年の報告によれば、呉三桂の反乱の後、莫元清は「芻糧・交銃等項を佐辦するを爲」したという⁵²。我々が知る非常に少ない経済的基盤の他に、優れた火器や大規模な軍隊が莫氏が高平に踏みとどまることができる支柱の一つであったことを、これらのことが証明している。

この他に指摘しておくべきことは、16世紀後半から17世紀後半は、ベトナム史上の「戦国時代」あるいは「戦争の世紀」（これは私の呼び方である）であり、連綿と続いた戦争がベトナムの軍隊と武器、特に火器を鍛え上げたということである。北鄭南阮もまたそれぞれオランダとポルトガルの傭兵部隊を招聘し（高平から退いた後の莫氏の軍隊の中に外国の射撃手がいたかどうかについては、我々に知るすべはない）、ベトナム全体の火器のレベルは大幅に向上した。そして17世紀、更にはその後に至るまで、ベトナムの火器のレベルはいくつ

かの面において中国を超えていた。このことが、明末清初に「交銃」あるいは「交槍」の陸路（雲南あるいは広西）での中国への流入を招き、中国では大量の模造品が得られるようになり、中国の地方の武装勢力（なかでも南方、特に雲南）が武装しただけでなく清朝の正規部隊も武装するなど、「交槍」ブームを巻き起こした。この事実は、明末清初の中越関係、ひいては世界の軍事史にとっていくつかの面において意味をもつ。まず一つの側面は、これは一つの傍流、民間と地方の交流であって国家政府間の交流ではないため、これまで学者達が注目してこなかったが、その意義は非常に大きいということである。中越関係史の研究はこれまで、重大な政治・外交・軍事（例えば戦争）・経済、そして文化等の関係を重視、つまり両国関係の本流を重視してきたが、傍流についてはその掘り起こしに注意を払ってこなかった。この「交槍」ブームは本流ではないが熱い流れで、ベトナムと中国の境界地域のさまざまな側面、例えば軍事・戦争、貿易（火器の交流も当然貿易に関わる）、辺境の住民、国境の警備、猟師などに影響を及ぼしており、莫氏は当然その中において非常に重要な役割を演じていた。このことは、中越両国の正式な交流という本流の大きな流れ以外に、非政府の、あるいは民間の交流という傍流の小さな波も非常に多種多様で、歴史学者は注意深く頭を低くして「下」を見、これら傍流の小さな波を調査して発掘するしかないということに気付かされる。もう一つの側面として、火器技術の世界的規模での伝播についていえば、これは13世紀に中国の火器技術が世界の他の地域や国に伝播した「第一波」の後、15世紀末期、特に16世紀初期以後にヨーロッパの火器技術が世界のその他の地域や国に伝播した「第二波」であるということである。この第二波のうち、海路を経たインド、東南アジア、中国、日本、朝鮮への伝播についてはすでに多くの論述があるが、ベトナムから陸路を経たことについては、いまだ学者の系統的な研究はない。それゆえ、中国の「交槍」ブームは近世の世界軍事史上でも非常に重要な意義を有しているといえよう⁵³。

第三に、大沢一雄が指摘したように、鄭阮南北戦争（1627-1672年）は、高平莫氏の実在に客観的な条件を作り出したということである⁵⁴。1645-1661年の16年という長い期間中、莫氏と黎朝の間にはほぼ戦争は発生しておらず、一見少し奇妙に感じる。しかしこの時期、黎朝（鄭氏）と広南阮氏の間には大小21回の紛争（1643年2回、1655年4回、1656年2回、1657年1回、1658年5回、1660年7回、1661年1回）が発生していた。鄭阮双方の最後の戦争は1672年に発生し、その後間もなく停戦し、ほぼ半世紀にわたる鄭阮紛争が終結した⁵⁵。1645-1661年の間の、南方阮氏との延々と続く戦争が黎朝の精力すべてを巻き込んだことに疑いはなく、北に気を配る暇がなかったのは当然であった。南方の阮氏との戦争が休止している間、特に鄭阮紛争が最終的に1672年に終結した後、黎朝はすぐにその精力を莫氏に向け、1662年と1666年、そして特に1667年と1677年に大規模な進攻を行った。そして最終的に莫氏を高平から追い出し、莫氏の残党は広西へと逃れた。もしも1669年の清朝の干渉がなければ、莫氏は1677年まで高平を占拠し続けることはできなかっただろう。我々は、黎朝側が1669年に李仙根と交わした、「高平は累代叛逆す、本国は多少の錢糧を費やし、多少の

性命を傷つけ、再び取らんとするも得ず。」⁵⁶という言葉から、黎朝による莫氏消滅が難しかったことが分かる。もし鄭・阮の南北対峙が半世紀もの長きにわたらなければ、高平莫氏の問題は1669年まで引き延ばされることはなかったはずである。

基本的に信頼できる欧米の史料も、この問題にさらに多くの興味深い情報と証拠を提示している。宣教師のボルリChristoforo Borriが1618-1622年に阮氏統治下のクイニョン（Quy Nhon、帰仁）で見聞したことによれば、莫敬恭が高平を占領するとその地の人々から歓迎され、そのためその統治は大いに強固になったという。更に特に興味深いことに、ボルリによれば、莫敬恭と広南阮氏は同盟を結び、鄭氏を南北から挟み撃ちする準備をしていたということである。もしも前者が成功しトンキンを掌握したならば、コーチシナは北方に対して再び臣を称し貢物を献上する必要がなくなる。このような事態に直面して鄭氏は恐れ不安を感じた。そこで毎年大量の軍隊を派遣して高平莫氏を包囲討伐しようとしたが、その軍隊は5、6日行軍しなければならず、敵にすべての水源に毒薬（薬草）を入れられ、人馬ともに甚大な被害が出たため結局成功させる術がなかった。度重なる困難と高い代償に直面し、鄭氏は兵を兵營に撤収させるしかなかった⁵⁷。これは、高平の山岳地帯の行軍が困難であったこと、そして背後を敵に挟まれるという鄭氏の状況下では高平政権を一掃することが難しかったことを証明している。

『王室後裔』は、中国国内の「中外関係史」研究にある二つの特有のパターンから大きく抜け出している。過去半世紀余りの研究では、中国の学者はしばしば「中外友好」というパターンを取り入れて中外関係史を研究してきた。しかしそれにより、関連する研究がしばしば学術的意義のない常套句へと流れてしまい、それらの研究の学術的価値を大きく下げる結果を招いてしまった。『王室後裔』はこのようなやり方を打ち破り、中越関係史には、実力を基礎とした交流の法則があることを指摘した。このような結論は非常に力強く、「中外友好」というパターンは事実に反し、生彩を欠くものだということを、更に明確に浮かび上がらせた。『王室後裔』がかなりの程度抜け出しているもう一つのパターンが、「中国中心主義」である。前述したように、本書は大量の中国の一次史料を利用しているだけでなく、更に多くのベトナム側の一次史料をも利用している。また、著者は明清両朝のベトナムについての見方を検討しているだけでなく、ベトナムの中国についての見方を特に重視して研究している。それは、ベトナムが中国の朝貢体制の規定を遵守していることについて検討し、またベトナムが中国(特に清朝)の一部規定について抗議し拒絶していることも強調しているといったことである。例えば、『王室後裔』第七章第三節の二（pp.208-221）では、清朝とベトナムの間で、五拜三叩か三跪九叩かという問題について何度も論争が起き、ほぼ百年（1667-1761年）の長きにわたってそれが続いたことについて詳しく検討している。この儀礼の争いは、ベトナム側が己の立場を堅持して安易に妥協せず、しかも敢えて「天朝」と争うという特徴をよく反映している。こうした検討は『王室後裔』の最も優れた点の一つである。この「横さまに看れば嶺を成し、側よりは峰と成る」（蘇軾「題西林壁」）という多方位、多角度

からの研究方法によって、その結論が客観的なものへと導かれており、それは貴重なことだといえよう。

『王室後裔』のもう一つの特徴は、著者の史学的基礎と言語能力が融合していること、そして可能な限り国際学術界とリンクさせる努力をしていることである。中外関係史の研究は、二つあるいは二つ以上の国が関わるので、言語的に研究者は更に高いレベルが要求される。本書の著者は深い史学的基礎だけでなく、程度は異なるが英語、ベトナム語、そしてフランス語を学んだ。このことは中国国内の東南アジア史学界で長く続いた、外国語はできるが歴史の基礎が欠けている、あるいは歴史の基礎は有しているが外国語が分からないといった状況乗り越えたといえる。依然としてこのような状況は中国の東南アジア史研究をかなり悩ませているので、牛軍凱がこの局面を抜け出したことは尊敬に値し、更に多くの若い学者が見習うようになるだろう。そのほか、著者は自身の研究を国際学術界とリンクさせることにも尽力しており、日本、韓国、そしてベトナムの学者の論著を参照しているだけでなく、欧米やオーストラリアの学者の論著も参照している。これは非常に喜ばしい現象で、中国の若い世代の学者が世界に向かって進み、世界とのリンクと融合を望み、決意していることを明確に示している。中国学術の希望は正にここにあるといえよう。

牛軍凱は、かねてから世界の東南アジア研究の動きにかなり関心を寄せてきている。私が知るところでは、1996年には早くも欧米諸国の東南アジア研究に関連するいくつかの著作を参照して、「二戦後西方的東南亜古代史研究」という一文を著して欧米諸国の東南アジア研究の動向を紹介し、「現地化」あるいは「本土化」⁵⁸、「自律史観」、「近世」、「マンダラ」等⁵⁹を含む、いくつかの重要な概念を提示している（残念ながら簡単な紹介のみに留まる）。中でも欧米諸国で使用されている東南アジア史に関するいくつかの名詞の翻訳は適切で、真髓を伝えている。たとえば、「近世」という言葉が好例であろう。中国大陸や台湾の学者は通常、「近代早期」と直訳する⁶⁰。翻訳に誤りはないが簡潔さに欠ける。私はリードの『東南亜の貿易時代：1450-1680年 (*Southeast Asia in the age of commerce, 1450-1680*)』（北京：商務院書館、2010）という本を翻訳・校正した際、日本史の時代区分を参考にし、この言葉を「近世」と訳した⁶¹。図らずも牛軍凱が1996年にはすでにそのように訳していた。これは偶然の一致であるがとても嬉しいことで、また牛軍凱の翻訳の知識に感心させられたものである。

『王室後裔』は、不確かなものを捨てて真実を残し、粗雑なものを捨てて優れたものをとるために、史料の考証に多大な労力を費やし、中越の一次史料の中の多くの誤りを指摘している。例えば、ベトナムで数百年来広く伝えられてきた万暦帝と馮克寛との1598年の対話は歴史的事実というわけだけでなく、その誤りは『大越史記全書』からとした。その他、陳荆和が校訂した『大越史記全書』の原文によれば、清康熙八年（1669年）、清朝は李仙根らをベトナムに使節として派遣したが、「使我以高平四州退還莫氏。時廷臣與清使辨解、往返數四、清使堅執不聽。上以事大、惟共時命姑且從之。」⁶²とある。しかし牛軍凱の引用文は、「上以事大惟恭、時命姑且從之」としている。陳荆和が原文の句読点を校訂したが、文字に誤りがあ

るため難解である。おそらく牛軍凱はそれに変更を加え（しかし典拠は明記していない）、その結果語句が比較的通じて解りやすくなったのではないかと思う。ただ変更を加えたとしても、やはりその他の文書に基づき、説明を行うのが適切であろう。さらに指摘しなければならないのは、牛軍凱の引用文もお完全に正確ではなく、一字の違いがあるということである。潘輝注の『歴朝憲章類誌』の文では、「上以事大惟恭、特命姑且從之。」⁶³とある。このように「時命」を「特命」に改めれば完全に意味が通って明瞭になる。「時」と「特」は手書きの場合似ており、書き写す際に誤ったのだろう。

『王室後裔』は、まず比較という方法を中越関係史の研究に取り入れており、目新しく感じられる。例えば、第三章（「南明と安南の関係についての研究」）第四節（「朝鮮の南明に対する態度との比較」）では、牛軍凱は、安南の南明に対する態度と朝鮮の明朝に対する異なった態度とを、いくつかの側面（明清との関係、宋明理学が影響を与えた状況、そして清初の文化についての認識）から比較し、安南は南明に対して「事大的形式」があっただけで、朝鮮のような偽りのない「事大主義」はなかったとの結論を得ている。その中では、印刷技術の普及が遅かったことなどが原因で、宋明理学の安南への影響は限定的で、「たとえ（黎）聖宗の時期であっても、中国儒学の継承や研究はその真髓が熟知されておらず、ましてやそれを超えるなど考えが及んでいない。そのため、安南の儒家の士大夫は真に儒教化してはいなかった。」と指摘している。これは確かに啓発性に富んでいる。また牛軍凱は第七章第一節の中で、清朝初年、清朝が外国を冊封する際授けた印章のうち、朝鮮のみが金印で、安南、琉球、暹羅等は全て鍍金銀印であって造りにも違いがあったことを指摘している。安南と朝鮮との比較は非常に有意義な課題で、さらに展開させていくことが必要であろう。例えば、朝鮮とベトナムの中国との朝貢関係についてはもう少し展開させる余地がある。学界では、朝鮮、琉球、そしてベトナムが、中国を中心とする朝貢関係の中で重要な位置にあったことが認められており、牛軍凱も「明清時期、中国は周辺国家との間に制度化した朝貢関係を構築したが、中でも朝鮮、安南、そして琉球が最も典型的であった」と述べている。しかしそのように通り一遍の論じ方では、各国間の差異を説明するには不十分で、それについての具体的な比較と見きわめを必ず行わなくてはならない。例えば、和田博徳は、清朝が朝鮮、琉球、ベトナム、そして暹羅に派遣した冊封使の品級と朝貢の回数について統計をとり、その結果、大きな違いがあったことを見出した（朝鮮に赴いた冊封使は従一品から正三品、一方琉球とベトナムに赴いた冊封使は正五品から従七品であった。四国の朝貢回数は規定に従い、朝鮮は毎年4回、琉球は隔年1回、ベトナムは4年に1回、暹羅は3年に1回であった。そして1789-1850年の間にこれらの国が清朝に朝貢した回数は、それぞれ62回、44回、19回、31回だった）⁶⁴。このように、ベトナムやその他の国と、朝鮮とを比べると、朝貢関係は後者より疎遠なものであった。このように数値化した研究は重視すべきであり、他の王朝にも広げるべきであろう。

この他に、朝鮮とベトナムの「衛星朝貢体制」の比較もこの問題をうまく説明できるだろ

う。朝鮮は15世紀と16世紀に北方の女真（野人）を対象に、自身の「小天朝」あるいは「ミクロ／ミニ天朝礼治体制」を築き、日本（倭人）を「藩籬」あるいは「臣民」とさえ見なした（これはもちろん想像に基づくものだ⁶⁵）。しかし、朝鮮の地理的位置に基づけば、その「ミニ天朝礼治体制」に組み入れることができたのはせいぜい女真だけで、さらに長続きもしなかった（明朝は当然、朝鮮が自身の朝貢システムを構築することに反対した）。以下比較してみると、ベトナムの「衛星朝貢体制」は中国とは全く比べものにはならないが、多かれ少なかれ虚実相半ばであるとはいえ、いくつかの「貢臣」（例えば、ラオス、カンボジア）があり、朝鮮の「小天朝」と比べればやや形が整っている。これもベトナムの中国との朝貢関係における距離が、朝鮮よりも遠いということを反映していよう。その他の要因を考えると、例えばベトナムの統治者は、内には帝と称し、外（中国）には王と称していたが、朝鮮国王はつねに王とだけ称していたなど、すべてがベトナムと中国との間には文化的にも関係上でも距離があったことを物語っている。このような状況が作り出された原因は、牛軍凱も検討したこと以外に、やはり地理的な実際の距離を考慮しなければならないだろう。中国の思想や文化が伝わるのに、朝鮮までは非常に短い距離しかないが、ベトナムまでは非常に遠い⁶⁶。その上、中国文化の雰囲気をもともと希薄な華南を（特に早い時期に）通過するので、必然的に幾重にも濾過された。さらに重要なことは、近代以前、朝鮮は中国文化だけが唯一の基準値であり、その他の文化の影響は受けなかったが、ベトナムは色濃い東南アジア文化の雰囲気の中にあって、中国文化の伝播や浸透はさらに難しかっただろうということである。牛軍凱が指摘した、ベトナムの印刷技術が発展していなかったことに関連するが、ベトナムの史書は朝鮮と比べると非常に少ない。これはもちろんすべて中国部隊の焚書行為（例えば、明の成祖の時、兵を率いて安南を侵略した張輔）に帰することはできず⁶⁷、より重要なことは、ベトナムの書籍が本来多くないということにある。火器に関連する史料を例にすれば、私の大まかな印象では、朝鮮側はベトナム側の100倍ほどあるだろう。

いずれにしても、『王室後裔』は、極めて熱心に研究し、非常に深く掘り下げ、詳細に考証し、精確に論述している。これは中国大陸の東南アジア史研究の新たな水準を示す代表作というだけでなく、中国と莫氏高平政権との関係を深く研究した国際的に唯一の専門書である。本書の出版は、中国の、ひいては世界のベトナム史、中越関係史、近世（約1400-1800年）東南アジア史、そしてアジアの朝貢体制の研究に大いに寄与すると確信している。

Ⅲ 『王室後裔』の限界と不足

どんなに偉大な著作であっても完璧なものにするのは難しく、同じ一冊の著作でも、学者が違えばその見方が完全に一致することはありえない。『王室後裔』が選択したテーマの意義と重要な貢献について肯定的に評価した後、ここでは本書に存在する欠点と不足について、詳細に、真剣に、深く、鋭く、検討したいと思う。もしもそうせずに、本書の欠点や不

足について、当り障りなく手短に触れるだけ（例えば、「欠点はあるが、問題にはならないので、一つ一つ指摘しないがご容赦いただきたい」といった決まり文句に陥る）ならば、牛軍凱が期待する「真の学術的批評」から大きく後退し、有名無実にさえなるだろう。これまでにすでに指摘した以外に、以下何点か不十分な部分がある。

第一に、「友好関係」がなお完全に取り除かれておらず、「中国中心」の痕跡が見えるということである。先に指摘したように、『王室後裔』では「友好関係」と「中国中心主義」両方の克服に大きな進展があったが、しかしまだ徹底しておらずさらなる検討が必要であろう。

『王室後裔』の中に、「明朝と朝鮮の関係は一貫して非常に友好的であった。万暦年間には明朝が大軍を派遣して、日本の侵略に抵抗する朝鮮を助け、明末には後金の拡大に双方が何度も協力して抵抗するなど、共に闘う中で友好を深めた」というような一段落がある。一見してわかるように、これは中国国内の政治的学術用語の影響を受けている。韓国の学者全海宗がどのように述べているか見てみると、「言うまでもないことだが、明朝の出兵の動機とその考え方はその内容に基づくもので、自身に降りかかる危険を避けるためにとった行動だったといった方がよいだろう。」⁶⁸としている。

私は、厳正な歴史研究の中では、「友好」や「友誼」といった言葉を使用して国家関係を形容することは避けるべきだと考える。故に、国家関係には「敵対関係の他には、平和的關係がある」とし、「友好」関係を提示しない⁶⁹全海宗の見解に同意する。黄枝連は、朝鮮王朝と明王朝の関係を、明の太祖と李成桂の諍い後の「正常化と緊密化」、あるいは「諍いなく平和」であると指摘し、通常「友好」や「友誼」といった類いの語句は使用していない⁷⁰。中国春秋時期の有名な「秦晋之好」はもちろん典型的な政治的婚姻による結びつきをいうが、この「好」は現代の意味での「友誼」とは全く無関係である。ベトナムの史学者の呉士連も、黎朝が明軍を破り駆逐した後、「好を明国と結び、交隣の礼を存す也。」と述べている。後期黎朝・西山両朝の高官であった呉時任（1746-1803年）が著した『邦交好話』の中に、「請好」「永好」という語句がある⁷¹。この「結好」や「請好」、「永好」（同義語に「交好」や「修好」もある）は、「結怨」（同義語は「交惡」）の逆で、後者の意味は関係が決裂している（特に戦争をしている）ことであり、前者は戦争していない、つまり平和的な関係を保持している、あるいは正常な関係を回復したことであり、現代語の「友好」あるいは「友誼」がもつ意味はいささかも含まないと私は理解している。ある研究者は、中越間の平和は調和や友好の結果というわけではなく、「中越の伝統的な関係の中での平和は、戦争の結果であって、（両国）関係の調和（の体现）ではない。それは戦争の記憶の制度化であって、（中華）帝国の美德の制度化ではない」⁷²と指摘している。

『王室後裔』の最後の一章、つまり第八章では、辺境の土司や割拠勢力が中越関係に与えた影響について専ら検討し、検討の視点を国家レベルの問題を中心とする交流から地方レベルへと転換している（これは中越両国の朝貢関係の内容を豊かにした）。安南の各政権は中国側に協力を求められた際（例えば国境地域の反乱者を連合して攻撃するなど）、皆あれこ

れと迷っており、一心に力を尽くして助力したというわけではなく、主に己の利益のことを考えていた。私は「友誼」という言葉の語源は知らないが、遅くとも1882年には既に両広の総督が中越両国の関係を形容するのに使用している。そして翌年には再びフランスの公使がベトナムの問題で「中国法国和睦之誼」に言及しているが、一見して分かるようにいずれも外交辞令である⁷³。このように、「友誼」という言葉は、現代の政治家や外交関係者がつくり出したものではないが、政治的になった歴史学者によって引き継がれ且つ濫用されている。古今東西の国の交流を見渡せば、国家の利益が最も基本的な出発点であり「友誼」であるとは全く言えない。チャン・チョン・キムは「こちらの国とあちらの国との交渉は、人々が「義のため」という名目で「利のため」のことを行っているだけである。」⁷⁴と指摘している。それゆえ歴史学者は美しく飾り立てる必要はないし、政治家や外交関係者の外交辞令に惑わされてもいけない。

中国中心主義の問題に関しても検討する必要がある。数年前、私は論文で「外中関係史」の視点で中国と外国との関係を研究することを提唱し、「中国中心主義」を批判した⁷⁵。当時、私の中国中心主義についての定義としては、中国の立場にのみ立ち、中国語の史料だけを利用して中国と他の国との関係を取り扱い研究することであった。いま思えばその定義は全面的あるいは完全ではなかったといえるので、他の学者の見解も取り入れてそれを補足したいと思う。すなわち、中国の朝貢体制の中の主導的立場のみを重視し、その体制の中の他の国家の立場からの観点を疎かにするやり方である⁷⁶。このような点に基づくと、『王室後裔』は一方で比較的多くの紙幅を割いてベトナム史学界が中国の侵略拡張とベトナムの反抗を強調しすぎ、その狭隘な民族主義が真実の完全な歴史を遠ざけて越中関係を客観的に反映できなくしていると批判し（このような批判はもちろん必要であり正しい）、一方で明清の皇帝と役人の知恵、そして彼らが中越関係における問題を処理する際に示す道義をしばしば賞賛し、中国側を誉めたたえる口ぶりに満ちていることに気付く。しかし中国の民族主義を批判しないところからは、史料の中に隠されているベトナム側の観点や感情の発掘はなされない。それゆえ客観性や全面性が失われ、また中国中心主義の傾向を帯びてしまったのだと思われる。

この方面では、何人かの研究者がすでに我々のために手本を示してくれている。例えば、何芳川は「華夷秩序」に言及した際、以下の通り、それを高く評価しているが、容赦なく厳しく批判することも忘れてはいない。

中華帝国とその統治者は、一貫して「華夷」秩序の中で、優位な立場で全てを凌駕する地位にあった。そのため、自らの対外関係を処理する際、そのような機会にはいつも中華帝国の傲然として尊大な大国主義的意識が彼らの様々な仕事に深刻な影響を残した。「華夷」秩序内の国家が上述「一」の原則に違反した場合、たとえそれが中華帝国の主観で彼らはこの「一」の原則に違反したと認識しただけであっても、「共に太平の

福を享受する」許諾をわきに投げ捨て凶悪な顔を現わしただろう。この点は、彼ら自身の近隣、例えば朝鮮やベトナムとの関係を処理する際にとりわけそうであった⁷⁷。

ここでは、中華帝国の「凶悪な顔」は隠されておらず、実に貴重なこといえる。

特に、黄枝連が『天朝礼治体系研究』の中で、事件・人物について論評する際、論じる対象の国の違いはそのままに、民族主義の影響を受けず、その事実に限って議論をし、客観的で公平であるのは非常に見習うべきであろう。例えば、彼は同時に以下のように指摘している。明の成祖永楽帝（1413年にコーチンに詔書を送った）と豊臣秀吉（1590年に朝鮮国王に書簡を送った）両人は、「いずれも顕著な大国的排外主義と文化的排外主義の誇大妄想狂的意識を持っていた」としている。そして朝鮮の李太宗の傑出した才能と遠大な計略、遠い将来を見通す広い視野を讃えているだけでなく、明の永楽帝と李太宗とが共に君主の地位を奪い取ったことを明らかにし、両人は「口に出さなくても、互いに賞賛していた」とした。さらに、「天朝体制は悪事を隠し、多くの「非礼」な事件の決裁を済ませている」と直言している。また、明の万曆朝の朝鮮への派兵は、朝鮮への最大限の善意と助力であり、史上前例がなく、高度な国際主義を体現していると指摘しているが、しかし朝鮮人の感情や訴えは明朝の重視を得られなかったとし、さらに、明朝の派兵は単に朝鮮のためだけでなく、日本の侵略が中国の安全もおびやかしていたためだったと指摘している。そして、日本の懷良親王による明の太祖からの朝貢要求への返信（「相逢賀蘭山、聊以博戯、臣何惧哉」）は、浩然の気に満ちた大言壮語であるとしたが、200年余り後に豊臣秀吉の侵略に抵抗する朝鮮人民と、500年後に日本の帝国主義に抵抗する中国人民にとっては、懷良親王の警句は彼の子孫への仕返しとすることができると指摘している。また、中国を中心とした天朝礼治体制は極めて大国的排外主義、文化的排外主義であるが、西洋の帝国主義の搾取や略奪、奴隷のような抑圧とは異なることを指摘している⁷⁸。中国がベトナムに接するとき、大国的排外主義や文化的排外主義を帯びていなかったことがあるだろうか（しかしそれを明らかにし、研究する学者は少ない）。それは李仙根が1669年に書いた『安南使事紀要』から、すでにその一端がうかがえる。莫元清を再び高平に戻すことに安南側が同意するよう説得するため、李仙根を正式な使者とした使節団は、安南の首都に四十日余り滞在し、何度も「くどくどと話した」（李仙根の言葉）後、安南側が最終的に清朝の段取りにしぶしぶ同意した。李仙根は、清朝使節団と安南側との対話（通訳を通した）と書簡の往復を詳細に記録しているが、そこには、中国帝国の尊大さ、横暴さ、さらには粗暴ささえもはっきりと現れている。以下に列挙する。

卷一、第十二、十三葉（88頁）：安南側は、清朝の勅命が莫氏の問題を処理することに関わる計画であることをよく知っていたので、なかなか詔書を受け取らなかった。李仙根は、安南は「多方猜疑、如此亦甚愚矣」と考えた。その後、「設使朝廷下一紙、命爾国送某人頭来、爾国幹惜此一頭而終不奉之乎？……皇上好生同仁、造福無疆、併未有偏傷爾国之意。」と述べている。解釈：朝廷が何かをしろといえ、それをしなければならず、人を送れといった

ら人を送らなければならない。朝廷の一举一動はすべて安南のためであり、ひたすら安南のために考えているだ。

卷一、第十四、十五葉（89頁）：安南は、清朝より以前は五拜三叩の礼を行っていたが、清朝の使節団は安南国王黎維禧⁷⁹に三跪九叩の礼を行うよう強要した。しかし「拜稽不甚了了」だった。副使楊兆傑が前に進みでて「就教之」したが、黎維禧は「驚懼欲避状、左右捉刀者擁至」だった。李仙根は笑って、「何胆怯、乃爾連叩頭即是矣」と言った。解釈：蛮夷の小王は、三跪九叩をしろといわれたら、三跪九叩をすればよい、簡単な事ではないか！

卷一、第十五葉（89頁）：「無非爲王社稷生靈計。」解釈：やはり全て安南のためである。

卷二、第一葉（90頁）：李仙根は通事を通して二人の安南の役人に、「爾二人方進貢回来、中国規模、朝廷福澤及我等来意、爾自悉知矣。」と述べた。解釈：ここで重要な点は「中国規模」で、あなた方は中国の偉大さを見なかったのか？という意味である。

卷二、第六葉（92頁）：「正所以愛安南之甚、不欲以高平之僻壤而害安南之全局。」解釈：中国は安南を深く愛している。

卷二、第九・十葉（94頁）：「夫小固不可以敵大、弱固不可以敵強。貴国能敵中原一省乎？人物器械能敵遼左、西北之万一乎？……若使貴国非素恭順、則問罪之師朝發夕至矣。」解釈：ほんの小さい安南は猫の額ほどの狭い土地だ。朝廷の百万の精兵に掃討され踏みつぶされないよう気をつけなさい。

卷二、第十二・十三葉（95-96頁）：「自不宜以無益之高平、而傷上国之歛心。……夫兵、凶器也。信而順守国之宝也。……黎季犛（黎季犛）以詐殺（陳）天平而父子受戮、貴国之所知也。……夫朝廷之不輕加兵于安南者、帝王之度也。執事輒以為無加兵之日、而肆其虚誕、則悖逆之節矣。」

卷三、第十七・十八葉（98頁）：「或者大清兵力之強盛、王未之知。……俱皆一以当十、十以当百……何堅不摧、何敵不克……強弓悍馬、健將驍卒、三省同勒、九道併進、吾見安南一塊土終無噍類耳。」解釈：朝廷の精兵は安南を焦土と化すこともできるのだ！

卷三、第二・三葉（101-102頁）：安南側が「（莫）元清與我水火一半、見不得面、豈可復做一塊？」と上申すると、李仙根は、「爾知黎莫如水火、抑知天地間有水不可少火、有火不可少水乎？以此知有黎斷不可少莫矣！這水火二者天地少一件不成世界、人身少一件不得生活；相近則相用、相背則為害。」と述べた。解釈：朝廷の正使は詭弁を弄し始めた。

卷三、第四葉（102頁）：「爾国與中国不等。小罪或可寬赦、大罪唯加征討……勢必至于用兵、只消演雲・兩広十抽一二、朝令夕至、爾国齏粉矣。」解釈：またしても威嚇している。

卷三、第七葉（104頁）：「当初黎季犛詐殺了陳天平、後來国亡族滅、不是兒戲的！」解釈：高平は安南にとってどのような使い道があるのか？主国が喜ぶか喜ばないかが最も重要なことだ！胡朝の国は破れ一族は滅びた。先人の教訓は目の前にあり、冗談ごとではない。

卷三、第九・十葉（105頁）：安南側は、莫元清が高平を追い出された事を、「天意該亡他、今若還他高平是違天意了」と述べたが、李仙根は、「天何言哉？天說欲亡元清、你會聽見否？

有何憑據？到是皇上乃天之子也！天之子教你還高平、確有憑據。天子之意如此、則天意可知矣」と述べた。解釈：またしても詭弁を弄している。

第三、第十三・十四葉（107頁）：「真是蛮子、不宜好幸……（李仙根は文書を焼くと脅し）只是触朝廷之怒、発兵掃蕩、可怜你国了！……通事俱变色相視而去……就是沐猴、也当醒了、何爾国之愚也！」解釈：安南人は野蛮で愚かである。もしも私が文書を焼いてなくしたならば、債務はあなたがた安南のせいになるが、どうするのだ？

卷四、第十四葉（115頁）：「有四字批評、曰愚、曰疑、曰詐、曰傲。愚則不認理、疑則不信任、詐則其言不可信、傲則自謂無罪也。此四字如銅牆鐵壁、牢不可破！」解釈：安南人は救いようがない（中国人は安南人に対して好印象を持ったことがない）。

まとめると、李仙根の策略は、一、脅す；二、ひけらかす（「中国規模」は朝廷の強大さのことである）；三、詭弁を弄する、である。これら全ての後ろ盾は清朝の実力であった。中国の立場からいえば、貢臣を守る必要がある。しかし安南の立場から見れば、領土保全の問題であり、莫氏政権については当然それを除くのがよい。安南人からみれば、清朝は当然横暴で理不尽であり、ほしいままに内政に干渉する。その策略は、まず時間を引き延ばし、清の使節が考えを変えるのではないかという一縷の望みを抱かせる。しかし最終的に本当にうまくいかなくなると、莫元清を再び据えることにしぶしぶ同意するしかなくした。安南国王黎維禱は「非常に鬱積していた」⁸⁰ということだが、確かであろう。安南の君臣が背後で莫氏の一件についてどのように議論し追い込まれたのか、我々には確実に知る術はない。しかし清朝に対しては非常に怒りを感じ、且つどうすることもできなかったはずである。中国の学者は、中国は「強をもって弱を凌ぎ、大をもって小を圧している」⁸¹わけではなく強く主張するが、李仙根の言葉と論理は、中国が確かにこのようにしてきたことをまさに証明している。

牛軍凱は、第八章の中で、広西の帰順土司が1687-1700年に数度安南の朝廷に朝貢し馬を献上したことを検討した際、以下のように論評している。

地方土司には外国政府と勝手に交流する権利はなく、無断で外国政府に贈り物を献じることにはさらに法に違反することであった。帰順土司が初めて黎鄭政権に「贈り物を献じた」のは、莫氏政権を攻め滅ぼした祝賀と見なすことができ、まだ心情的に許せるところがある。しかしその後の数度の黎鄭政権との交流は、明らかに清朝の中央政府の辺境地域に対する管理の弱さを現している。馬を献じることが当時西南各地の土司が明清朝廷へ貢物を献上する際の通常の制度だったので、似たやり方で黎鄭政権に馬を献じるとは、明清の臣下である土司の立場からいえば、明らかに適切ではない。もちろん帰順土司のこのような行為はおそらく以前の教訓をくみ取ったもので、国境地帯で向き合っている安南政権とは良好な関係を保たなければならず、そうすることで長期にわたる安定が得られると考えていただろう。このような中国の土司制度に背く行為は明清の土司制度の大きな弊害、つまりその割拠性を実質上反映していた。

このような見方、特に「心情的に許せるところがある」、「明らかに適切ではない」、「中国の土司制度に背く行為」というような、これに類する論評は、中国中心主義を反映しているだけでなく民族国家を中心とした思想をも帯びている。民族国家の成立および明確な国境は現代の歴史の産物である。現代以前のいかなる国境地帯にも「首鼠両端（どっちつかずの態度をとり）」で、同時に二つ、ひいては三つの国に納税し、朝貢していた部族や集団があった⁸²。このような状況は、中越の国境地帯にも当然あった。11世紀、儂智高がいた「広源は邕管羈縻州であったが、実際は交趾に服していた」⁸³。中国古代の官吏と現代の一部の学者は（後者はさらに甚だしく）、広源州は宋朝（中国）に属すと考えているが、それは名目上だけのことであった。14世紀、広西一帯で「辺境の住民が安南に服したのは、みな塩と鉄の利益による」だった⁸⁴。先に指摘した、17世紀「鎮安の酋長岑氏は半ばこれに服役す」もその一例である。どの国に属すかということに関心があったわけではなく（まして当時そのような概念はなく、さらに民族主義もなかった）、彼らの関心は、自身の利益、地盤、独立、そして生存にあった。中国（特に広西）史学界での儂智高の国籍についての論争（つまり「中国人」か「ベトナム人」か）、そして一部の学者の、いわゆる儂智高の反乱は「祖国の領土を守る」「祖国領土の統一を守る」ためだったとする見解は、いずれも民族国家や民族主義（そして地方主義と民族感情）の影響を強く受けた典型的な例である⁸⁵。実際、これらいわゆる「国籍」「祖国」そして「領土」といったものは、すべて後世の者が先人に無理やり押しつけたものであり、歴史的事実に反する。牛軍凱は「その地の土司にとって、明清の中央政府はるか遠く離れており、現実的利益に関わるのは中越国境地域の政治勢力であった。ゆえに、鎮安が莫氏に対して「半ばこれに服役す」、あるいは「是に諸土司は、只だ莫夷有るを知るのみにして、中国有るを知らず」となるのも理解できる。」と論評している。これはもちろん一言で要点を突いているといえよう。

中国からベトナムへと目を向けてみた場合、ベトナム人も知恵を有していたかどうか？もちろん有していた。有していただけではなくあらゆる局面すべてにおいて用いていたが、ここでは二例のみ挙げる。莫登庸は、怒りをこらえ、事を治めるために妥協して、ベトナムと中国の関係上、最も屈辱的な方法で中国に「降伏」したが、そのようにすることで明朝が戦争を起こすための口実を退けた。これは現代の学者鄭永常からみれば、莫登庸の「大いなる智慧」を明らかに示しており、莫朝も「それによって明朝の承認が得られ、後顧の憂いがなくなり、対抗する者に全力で対処することができるようになった」。これは全くその通りであろう。1790年、阮光平（阮恵）⁸⁶は甥の范公治を派遣して、自身が北京に赴き乾隆帝の誕生日を祝ったと偽ったが、これはさらにベトナム人の大いなる智慧を証明する。中国の学者のこの件に対する論評が、中国の立場と考え方を非常によく反映している。中国の学者は、阮光平自身が入朝し拜謁したわけではないと信じ、ある者は、乾隆帝が「愚かなふりをし、（偽の）阮恵と接見し、その後再び熱心に配慮した理由は、政治的に必要だったからであり、大局を見て、両国の安定と善隣を考えていたからであった。」としている。またある者は、「乾

隆帝と清朝にとって、今回来た阮光平の真偽はもちろん重要であるが、更に重要なことは、彼が宋代以来、安南国王という身分で来朝し拝謁した初めての人物だったということである。⁸⁷としている。このように、「名」は「実」よりさらに重要であった。

一部の学者は、中越両側の記載（徐延旭『越南世系沿革』と『清史稿』の「其实光平使其弟冒名来、光平未敢親到也（実際は、光平は弟に名を騙らせ、光平は自身で行こうとしなかった）」；『大南実録』「（阮文）惠以其甥范公治貌己、使之代（（阮文）惠は甥の范公治を自分のように見せ、これを代わりとした）」を前にして、必死に否定し、名前を騙り替え玉になることは絶対に不可能で、それは流言か「世間のうわさ」にすぎない、と考えている。また更に論評を進め、清朝はこれより前に冊封のため特使の成林を派遣し、成林自身が阮光平に会っているため、その「容貌は……偽ることはできないだろう」としている。そして後に阮光平が乾隆帝に謁見したことは、「福康安も付き従って同行し、常に一緒にいて顔色をうかがっていた。およそすべて裏付けがあるのは明らかで、いわゆる「是真不能假、是假不能真（本物を偽物にはできず、偽物は本物にできない）」ということだ。これに基づけば、書籍の失言もたちまち破綻し成立しなくなる。」としている。李光涛もまた熱心に、「乾隆の時代は、清代でいえば、まさに全盛期で、それについては述べない。ただ注意すべきは……「環跪称慶」（安南国王阮光平が屈服したことも含む）という記録で、その時の盛況を想像して知ることは難しくないということだ……このときも、清の皇帝が喜び得意になり「躊躇満志」だったことも予想しなくても分かる⁸⁸と述べている。これはベトナム人が並外れた智慧（もちろん満人の福康安の智慧もある）で演出した、世界最大の帝国を欺く外交上の茶番で、清の皇帝の虚栄心を満たし、己の目的をも果たすものだったということが分かるのではないだろうか。「今回我々は清国のあのじいさんをからかってやった！」と、阮光平とその臣下が考えたどうか、我々は知りようがない。政治上正確な観点からは、言葉としてももちろんそのようにはっきり言うことはできないし、史書はなおさらそのように記録することはできないだろうが、ベトナム人はこのように考えただろうし、それは情理にかなっているはずである。『清史稿』でのこの件についての論評は、「其（安南人）譎詐如此（彼ら（安南人）はこのように狡猾だ）」としているが、ベトナム人の角度から見れば、行かないわけにはいかないの偽物を派遣したということだ。これがどうして極めて賢くないと言えるだろう。李光涛は、乾隆帝が福康安に「誘うに利を以し、圧するに勢を以てすれば、その事はすなわち済まん」という策略によって阮光平を来朝させ、誕生祝いをさせるようにしたのは、「錦囊妙計（とっておきの妙案）」であると言っているが、実際この四字の言葉は阮光平が替え玉を派遣したことに使う方がより適当だろう。紙幅に限りがあるので、この問題を展開させることはできないが、私はこれをテーマに論文を書く予定である。

私が提起した中国での東南アジア研究に見られる「中国中心主義」は、一部の学者の注意を引いたようであるが⁸⁹、このような傾向を克服し、このような思考を取り除くことは非常に困難である。なぜなら中華帝国が育て上げた「中心主義」の歴史は長く、また近代の民族

主義の勃興、そして最近の中国の台頭が、更にこの種の時代遅れの「中心主義」を広げることになってしまった。中国の学者が全海宗の『韓中関係史論集』を『中韓関係史論集』と改めて訳したり、著者本人が採用した「緬中（外中）」を「Sino-Burma (Sino-Foreign)」と誤訳したり、「中緬」と誤って写したりしている。そこから国内の学者が、「韓中」「緬中」そして「外中」という呼び方にどれほど不慣れか分かる。牛軍凱はこの序文の初稿を読んだ後、手紙で、「私が未だ中国中心主義から抜け出していないとあなたに指摘された際、なぜ私は努めて双方を考慮した関係史を書こうとしているのか、最終的にはやはり中国の角度からみるのか、と私も考えているところだった。私自身長い間、「中国対外関係史」と「中外関係史」をきちんと整理してきておらず、中越関係史を書く際、無自覚に中国のベトナムについての関係史、あるいは中国のベトナムに対する政策と書いていた。国内で中外関係をやろうした場合、この落とし穴に陥るのを避けるのは本当に難しい。」と言っていた。牛軍凱のいう落とし穴を避け、中国中心論から抜け出すのは確かにとても難しい。それには学者たちが民族主義の束縛から逃れ、国家の利益を超越し、純粋な学術の視点から観察して歴史を書くことが求められる。中外関係史に関わる際、潔く「第三者」（つまり傍観者）となって、歴史の真相を探求しなければならず、いずれか一方に偏らないようにしなければならない。無私になってこそ恐れるものがなくなり、利害関係がなくなってこそ客観的でいられる。歴史は蘇軾が「題西林壁」で言うように、「横さまに看れば嶺を成し、側よりは峰と成る。遠近・高低、一も同じきは無し」である。中外関係史であろうと、その他の歴史であろうと、いずれも非常に複雑であり、視点・視野が異なれば結果も異なる。もしも中国の視点からのみ外国を見、ベトナムを見たならば、間違いなく客観性、全面性を欠く。牛軍凱が「国内で中外関係をやろうした場合、この落とし穴に陥るのを避けるのは本当に難しい」といったその原因は、つまり「廬山の真の面目を識らざるは、只だ身のこの山の中に在るに縁る」からである。つまり中国国内（「山中」）の政治文化、学術文化が学者の視野や思考を束縛しており（ベトナムの政治文化、学術文化がベトナムの学者を束縛しているということは、もちろん言うまでもない）、孫悟空がどのように飛ぼうとも、如来仏の手中からは飛び出せないということだ。故にこの種の束縛から抜け出すことが非常に重要となる。ただこの種の束縛を意識することが非常に重要で、知るは難く行ふは易い。民族主義や民族国家を超越し、客観的で正確な中越・越中関係史を書くことは、中越両国の歴史学者にとって厳しい挑戦である。

第二に、文献史料が単調だという問題である。長年研鑽を積み、中国、ベトナム、そしてフランスで大量の歴史資料を閲覧し、学術に一身をささげるその精神は敬服に値する！しかし別の側面からいえば、利用したその史料はいくらか単調であるようにみえる。たとえ歴史の研究をするといっても、古代の歴史の研究を含めて、我々は可能ながぎり史料の多種多様さ、いきいきとした論述を追究し、過去の歴史研究の単調で面白みがないところを変えていかなければならない（この方面では、リードの『大航海時代の東南アジア：1450-1680年』が古典的代表作であり、国内の同業者は大いに啓発されるだろう）。『王室後裔』が用いてい

るのは画一的な文献（もちろん質は高いもの）であり、明清両朝の豊富な地図資料に注意を払っていないし、民族学的な実地調査を行った、あるいはその方面を活用した大量の資料も使用していない。これらについては改善することができるだろう。明朝の安南に関連のある地図については、王自強主編の『明代輿図綜録』（北京：星球地図出版、2007）が参考になるだろう。清朝の安南に関する地図は更に多いはずで、李仙根『安南使事紀要』の中には「交趾安南国輿地図」がある。この他、ベトナム側の民族、地図の資料もより豊富で、その中にはすでに提示した『同慶地輿図』も含まれる。その他に、『王室後裔』の中で、重要な事件が発生した場所は、すべてベトナムの北部と広西、雲南である。ここの民族は多く、地形は複雑であるが、『王室後裔』はこの地域（特に高平地区）の地理状況や民族分布について詳細に描写しておらず（第二章第四節にある高平の地理についての簡単な叙述は、中途半端で、結局は不十分で力無く感じられる）、読者に明確な概念を与えない。豊富な地図やその他の資料はこの方面に非常に有用である。

第三に、『王室後裔』にも前後で矛盾する箇所がある。例えば、莫登庸一族の起源に関する問題で、一方では、ベトナムの学者が書いた越中関係の論文では、狭隘なベトナムの民族主義の影響を受け、莫氏一族と広東の蛋民（水上生活者）の関係を認めていないと指摘している。言外の意は、もしもベトナムの民族主義の影響がなければ、莫氏一族の祖先は広東の蛋民だったとなるはずだということである。しかしもう一方で、中越文献の中の莫氏一族の起源に関連する史料を詳しく列挙した（「附録一：莫氏家族起源小考」を参照）後、莫氏一族の起源についての二種類の見解（もう一つは、莫氏一族の起源はベトナムの李・陳両朝の名門莫氏であるという見解）を肯定も否定もせず、広東の蛋民起源説はやはり証拠を欠くとし、またベトナム莫氏説も高望みの、こじつけの嫌いがあると考えている。問題は、莫登庸一族の起源に関して、新しい重要な史料が今後出てくることほほないらしく、現在ある二種類の見解を除外することは、門を閉め切ってしまうことに等しい、ということだ。私個人の意見としては、二種類の見解のうち、必ず一つは正しく、そして広東の蛋民説の方により説得力があると思う。その理由は、雍正年間、莫氏後裔の莫敬曙が清朝の役人に述べたこと（つまり原籍は広東東莞県であるということ）が、最も重要な証拠となるはずだからである。

IV 実力は外交関係のバロメーターである

最後は、牛軍凱の論述を基礎とした私の論評である。利益は中越両国（および世界中のいかなる国）の交流の出発点であり、実力は両国関係のバロメーターである。まさに本文の冒頭で引用した、呉士連の中越関係についての洞察：「南北の強弱は、各々その時を以てする。北方の弱きに当たれば則ち我は強く、北方強ければ則ち我またこれが為に弱し。天下の大勢なり。」のように、このような南北強弱は両国関係の中に現れる。ベトナムがまだ独立する前、あるいは「北属期」、中国国内の安定と混乱、興隆と衰退が、交趾や交州に影響を及ぼし

た。チャン・チョン・キムの言葉を用いれば、「中国で混乱が発生し、中国人が自国内のことで忙しくしている機会を利用して、交州も蠢動し、独立して35年ほど」⁹⁰となる。唐朝末期、五代十国の頃、中国の国力が衰えて分裂すると、ベトナムはその機に乗じ、西暦939年に独立した。その後235年間、中国は「安南コンプレックス」（つまり安南独立の事実を認めたくない）のため、ベトナム国王をただ「交趾郡王」に封じていたが、1174年になってようやく「安南国王」に封じた⁹¹。これは南宋が江南のみを支配し、国力が日々弱まり勢いもなくなっていたため、このように冊封するしかなくなったのだろう。儂智高と安南は当然宋朝の脆弱さをよく知っていたので、敢然と中国両広に相次いで侵略し、更に安南軍はほしきままに住民を殺した。これは中越の歴史上、安南の唯一初めての中国への侵略で、その後の歴代王朝でベトナムが北に侵攻することは二度となかった。相対的に宋朝が脆弱だったため、両国関係における天秤はベトナム側に傾いたといえる。15世紀初頭、明軍が驚くほどの速さで安南を攻め落とすことができたのは、胡朝（1400-1407年）の内部分裂と大いに関係がある。つまり安南内部の胡朝に対する恨みが明朝につけいる隙をあたえ、明朝勝利の確率を大きく引き上げたということである（また明朝は武器についても圧倒的優位を保っていた⁹²）。

チャン・チョン・キムは1527-1592年のこの期間のベトナムの歴史を「南北朝」、あるいは1533-1788年を「紛争時期」と称している⁹³。私は軍事史（特に戦争の頻度）の角度から、1550-1680年の期間をアジアの歴史における「戦争の世紀」と称している⁹⁴が、この時期はベトナムの歴史における「戦争の世紀」でもある。明朝末期の中国史料は、莫登庸が即位した後のベトナム北部の莫氏、黎氏、武氏（武文淵）が割拠する情勢を「国土三分」⁹⁵と称している。さらに広南の阮氏を加えれば、ベトナムは確かに四分五裂していたといえる。そしてまさにこれがベトナムの莫朝以来の歴史の最大の特徴である。この情勢は言うまでもなくベトナムの歴史、そして中国との関係に非常に大きな影響をもたらしたが、中でも最も重要な側面は、やはりベトナムの、その前と後とを比較した場合に、全体的な国力が削がれ弱まったということであろう⁹⁶。このような分裂は、中越関係のバランスが中国側へと傾斜していくことを直接的に招いた。つまり中国は、ベトナムに対する関係の中で、両国関係がバランスを保っていた時期にはなかった強い姿勢を示すようになったということである。このことは、1540年に莫登庸が南関（現在の友誼関）に赴き自らを縛り上げ（「各以尺帛束頸」）、伏して許しを請い（「脱履洗[跣]足北面跪」）、さらに数級格下げされて「安南都統使」に封じられ、理論上「安南国王」でなく、広西管轄のもとに従属する一土司になったことに現れている（しかし実際は、明朝は依然として安南を外国とみなしていた）。莫登庸が「詞礼愈々卑く」し、さらに自ら「夷」「豕」と称することに甘んじていた理由は、当然明朝が「大将は征を専らにし、重兵もて境を圧」した⁹⁷からであった。「安南都統使」というこの称号については当然非常に不満であっただろう。この他に、冊封上のいくつかの内容にも変化があった。その中には、冊封使が南関に行かず冊封礼を行わなかったこと、勅印の格が下がり金印から銀印に変わったこと、朝貢の使節の待遇が下がったことなどが含まれる。牛軍凱は

また、莫朝の始めから、明朝が一貫して安南政権に圧力を加えていたことを指摘している。黎朝が中興したからといって明朝は待遇をあげたわけではなく、1597年には黎維禪も南関で許しを請い、「代身金人」を献じ、黎王は安南都統使に封じられた。これに対して莫黎双方は非常に不満を感じ、何度も改封を求めたが実現しなかった。しかし明朝への要求をかながみて、我慢して妥協するしかなかった。学者たちは、このような称号の改変に実質的な意義はないと普遍的に考えるが、実際は中越の実力バランスの増減の変化を反映しており、ベトナムが内部分裂によって、中国との関係上劣勢にあったことをはっきりと物語っている⁹⁸。牛軍凱は、許しを請うという形式で中国の政治上の承認を得ることは、莫氏から制度化され、後期黎朝や西山王朝もそれに倣い、阮朝の阮福映の時になってようやく廃止されたことも指摘している。

莫黎の対峙と南北紛争という三百年余りのほとんどの時間、安南は中国に対してあまり見られなかった恭しく耐え忍ぶ態度を示していた。しかし南明の小朝廷と安南との関係では状況は完全に異なっていた。例えば、1647年、南明は安南が請わないのに国王に封じており、これは安南の待遇が上がったということになる。その後、南明の有利な形勢は失われ、南明に対する安南の態度は大きく変化した。南明の使節は1657年、鄭主に跪拝の礼を行うよう迫られ、翌年、南明魯王の臣である徐孚遠が福建から安南に着いたが、鄭主への跪拝の礼を拒んだので、雲南に行くことができなかった。安南の南明への強硬な態度が、後者の勢いがすでに衰え傾きかけていたため、恭しく礼儀正しかった態度も傲慢で無礼なものへと変化したのは非常に明らかである。しかし清朝が中原に入り統治することになると、安南の態度はまた恭しいものへと変じ始めた。しかし西山王朝が起り、安南の国力が強くなると、安南の中国に対する態度はまた変じ始めた。牛軍凱が（第七章第三節で）指摘しているように、西山王朝の抗争を経て、元朝を起源とした、安南が中国に朝貢する際の「代身金人」の制度はついに廃止された。その理由は、西山国王は公明正大に政権を勝ち取っており、莫朝のように篡奪したわけではないので、当然「反て偽莫の科と儕に」（2005年版『邦交好話』原文）すべきでなく、また中国の大將を斬殺した陳朝や後黎朝のように代身金人を献じて罪をあがなう必要もない、ということだった。阮朝以後も代身金人を献じることとは二度となかった⁹⁹。『大南寔録』正編列伝初集、卷30、「阮文惠伝」と『皇黎一統志』第15回の記載によると、阮光平（光中帝）は清軍を打ち破り、清朝から何度も多くの贈り物や厚遇を受けたので、「自ずと願いがかなえられたと思ひ、傲慢身勝手さがますますひどくなり」、また「中国を軽視する気持ちを持つようになった」という。その後、阮光平は「昼夜中国に攻め込むことを画策し」、さらに中国に使者を派遣し婚姻を求め、また両広の地を要求する準備をした¹⁰⁰。牛軍凱は、代身金銀人を献上することと南関で束身して罪を請うこととは「実際上は朝廷が安南の内政に干渉しないという中越関係の特徴を表わしていた」と考えているが、私は更に、安南の力が弱い時、我慢して妥協せざるを得ない便宜的措置であったと考える。

阮朝は1802年にベトナムを統一すると、中国（清朝）への対抗意識、さらには批判的態度

がますます顕著に、そして激しくなった。西山朝から、ベトナムは越中の平等な外交関係を表す「邦交」という言葉を使用し始め、阮朝には固定化した。阮朝は清朝に使者を派遣し、「南越」の国号を求め、「しかも許可しなければ冊封を受けないといった」¹⁰¹。ベトナムは以前にはなかった対等意識で中国との関係に対処した。ベトナムはまた初めて系統的な「衛星朝貢関係（体制）」（濱下武志の言葉）、あるいは「大南帝国秩序」（劉仁善の言葉）を確立した¹⁰²。ベトナムは中国から独立した後、中国の朝貢モデルに似たものを早くも模索し始めた。そして15世紀後半期、黎聖宗の統治下（具体的には1485年）には、ベトナムはすでに「諸藩使臣朝貢京国例」を制定しており、「占城・老撾・暹羅・爪哇・〔満〕刺加等国の使臣及び鎮憲の頭目の如きの会同館に至れば、錦衣衛は壯士・五城兵馬郎將司旗軍等を差わし、各々宜しく法の如く監守し、関防を厳謹せよ」と規定した¹⁰³。阮朝の制度はつまり後期黎朝の継承とすべきで、記載上、より整ったにすぎない。注意すべきことは、ベトナムの朝貢モデルは、15世紀にはすでに大体の体裁をなしていたものの、19世紀になってようやく体系化されており、なんと四世紀近く引き延ばされていたということである。その原因は、この間のベトナムが三百年余り分裂状態にあったことによる。四分五裂したベトナムが全面的な朝貢体制を確立することは不可能だった。この他に、ベトナムは様々な方法を用いて、ベトナム人が考える中国の地位を人為的に低く評価しようとし、例えば自身を「中国」、中国を「北朝」「清国」と称したり、中国人を「北人」あるいは「清人」と称したりした¹⁰⁴。

阮朝は成立して間もなく、つまり1821年に、清朝に二度とベトナム人を「夷」と呼ばないよう要求した。明命帝はまた1830年に、清朝の「蛮夷」の風俗をまねないよう大臣を戒め、さらに1835年には、乾隆帝の詩歌の作品についてあれこれと批評している。1831年、ベトナムの有名な学者で、ベテランの外交官である李文馥（1785-1849年）は、福建で筆をとって一気に書きあげ、中国人がベトナム人を「越夷」と呼ぶことに対して強く抗議した。これらのことは、1540年と1597年に莫黎兩朝が自発的に自らを蛮夷と称したことと鮮やかな対比をなしている¹⁰⁵。このような対抗意識や批判的態度は、莫黎が対峙し南北が争っていた三百年余りの間は現れ得なかった。この他にも、中国の礼儀に従えば、中国の使節がベトナムに赴き勅命を伝える際、必ず南を向かなければならず、したがってベトナム国王は北を向いて指示を受けなければならなかった。このような配置がベトナムの従属的地位を現していた。あるベトナムの学者の研究によると、ベトナム王室は東西の向きで指示を受けることを堅持し、中国と対等であることを示していた。ベトナムの史籍の記載によると、一度だけ南北の向きで指示を受けた以外、その他全ては東西の向きであった¹⁰⁶。具体的な年代はおそらく阮朝だろう。なぜなら1821年に道光帝が広西按察使の潘恭辰を派遣し、ベトナムの明命帝を冊封したことが分かっているからである。『大南寔録』の記載によれば、「〔潘恭辰は〕凡事我國の典礼に従い、柔遜謙雅」¹⁰⁷とあり、朝廷の大使がおそらくベトナム側の儀礼と要求に屈したことを説明している。牛軍凱は、15世紀、黎朝の聖宗と明朝の使節錢溥との間で、どちらを向くかという問題で、論争がおきたことを指摘している。1462年に錢溥が使節として行

く前は、黄郷（諫）の使節だけが安南国王と東西で並んで座っていた。錢溥は安南国王と南向きに並んで座ることを要求し、何度も議論した後、黎聖宗がしぶしぶ同意したのだった。

時代は変わり、ベトナムはすでに大きく変化した。ばらばらだったベトナムは現在すでに統一され、国土もまた以前に比べるといっそう広くなった。逆に清朝の満州族はベトナム人の心の中では本当の夷狄となった。それに加え清朝の国力は19世紀に入ると衰え続け、ベトナムが外交上で中国に対して強い姿勢をとることとなった。莫朝から始まった中国に屈する一部の儀礼は阮朝で廃止された。牛軍凱が序論の中で指摘しているが、潘輝注は『歴朝憲章類志』（「邦交志」）の中で、宋元時期の越中関係は相対的に対等な交流関係だったが、明清両朝では下の国（ベトナム）が上の国（中国）に向かう朝貢関係となったとしている。このような変化は、まさに我々が考察したように、両国間の力のバランスの変化から始まるとすべきである。ゆえに私はこのような観点、つまり中越両国間の国力、特に軍事力のバランスが両国の関係をかなり大きく決定づける¹⁰⁸、ということに同意する。

牛軍凱は、学問に没頭し、寂しさに耐え、貧賤であっても志を変えず、十年の成果を集めて、中国の東南アジア史研究における一振りの鋭い剣を研ぎ出した。このような一意専心、一事に励む精神は、誰もが早さを求める現今の情勢のもとでは本当に極めて貴重で、それゆえなお尊敬に値する。このような精神のもとで生み出された著作は、絶対に、浮ついて深みがなく現れてはすぐ消えるというものであろうはずはない。蘇軾が千年ほど前に著した学問研究の名編「稼説（送張琥）」は、我々の今日の学問研究について深く考えさせられる。ここに一部抜粋しても構わないであろう。

……而斂之常不待其熟、此豈能復有美稼哉？古之人、其才非有以大過今人也、其平居所
以自養而不敢輕用以待其成者……流于既溢之余、而發于持滿之末、此古之人所以大過人、
而今之君子所以不及也……嗚呼！吾子其去此而務学也哉。博觀而約取、厚積而薄發、吾
告子止于此矣。

それゆえ私は、私が最も好み、また座右の銘としている范文瀾先生の学問研究についての
名句をもって、牛軍凱（そして国内の学界の同僚）と共に励みたいと思う。

板凳要坐十年冷、文章不写一句空。

これを序とする。

カリフォルニア州立大学フラートン校にて記す

2011年10月17日初稿

2011年11月5日定稿

注

- 1 牛軍凱、鄭永常、桃木至朗、蓮田隆志、J・K・ウィットモア John K. Whitmore、カテリーヌ・バルダンツァ Kathlene Baldanza、ジョン・ウィルズ John E. Wills, Jr、アンソニー・リード Anthony Reid、李焯然の諸氏からの資料提供と助力に謹んで感謝する。
- 2 John King Fairbank, ed., *The Chinese World Order: Traditional China's Foreign Relations* (Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1968), pp.2-3. 特に指摘しない限り、全ての訳文は筆者の翻訳による。
- 3 呉士連等撰、陳荊和編校『大越史記全書』（東京大学東洋文化研究所、上冊、1986年）、p.153。
- 4 この方面の論議は多いが、陳志剛「關於封貢体系研究的幾個理論問題」『清華大学学报』6（2010）（http://www.iqh.net.cn/zhongwai/info.asp? b_id=2&id=354）が参考となるだろう。
- 5 Kathlene Baldanza, "The Ambiguous Border: Early Modern Sino-Viet Relations." (Ph. D. dissertation, The University of Pennsylvania, 2010), pp.13-21.
- 6 中、日、韓の学者の著作（一つ一つ列挙しないがご容赦願いたい）の他に、アジアの学者があまり検討しないのがウィルズの著作、特に、*Embassies and Illusions: Dutch and Portuguese Envoys to K'ang-hsi, 1666-1687*. (Cambridge: Harvard University Asia Center, 1984) である。この他、Zhang Feng, "Rethinking the 'Tribute System': Broadening the Conceptual Horizon of Historical East Asian Politics." *Chinese Journal of International Politics* 2, 2009, pp.597-626; Anthony Reid and Zheng Yangwen, eds., *Negotiating Asymmetry: China's Place in Asia*. (Honolulu: University of Hawaii Press, 2009) を参照されたい。
- 7 私が最も熟知している中国とミャンマーの関係からいえば、中国大陸の学者が過去5、60年間で書いた中国とミャンマーとの関係史には、まだ不十分な部分が多くある。その中には、体系的な研究が不足している、その関係を朝貢モデルの大きな枠組みの中に位置づけずに考察を行う、ミャンマー語の史料を把握していない、そして中国中心主義が強い、といったことが含まれる。私は現在、*Burmo-Chinese Historical Relations* を執筆しているが、書名の中国語訳は『緬中関係史』とした。
- 8 全海宗『中韓関係史論集』（北京：中国社会科学院出版社、1997）、p.130。
- 9 John E. Wills, Jr. "Great Qing and Its Southern Neighbors, 1760-1820: Secular Trends and Recovery from Crisis", paper presented at Interactions: Regional Studies, Global Processes, and Historical Analysis, Library of Congress, Washington D. C., February 28-March 3, 2001 <<http://www.historycooperative.org/proceedings/interactions/wills.html>> (4 Nov. 2011).
- 10 庄国土「略論朝貢制度的虚幻以古代中国与東南亞の朝貢關係為例」『厦門大学学报』3、2005、pp.1-8。
- 11 John K. Whitmore, "Mac Dang-dung", in L. Carrington Goodrich, ed., *Dictionary of Ming Biography* (New York: Columbia University Press, 1976), 2, pp.1029-1035; 大沢一雄「黎朝中期の明・清との関係（1527-1682年）」山本達郎編『ベトナム中国関係史：曲氏の抬頭から清仏戦争まで』（山川出版社、1975）、pp.333-404；John K. Whitmore, "Chung-hsing and Cheng-t'ung in Texts of and on Sixteenth Century Vietnam", in K. W. Taylor and John K. Whitmore, eds., *Essays into Vietnamese Pasts*. (Ithaca, New York: Southeast Asian Program, Cornell University, 1995), pp.116-136.
- 12 Dinh Khac Thuan, "Contribution à l'histoire de la dynastie des Mac (1527-1592) au Viet Nam" (Ph. D. dissertation, Paris, 2003). [訳注] ベトナム語版はĐinh Khắc Thuận, *Lịch sử triều Mạc qua thư tịch và văn bia*. (Hà Nội: Nxb KHXH, 2001).
- 13 袁運福「略論越南歷史上莫朝」（鄭州大学碩士論文、1998）；鐘小武「明朝对安南莫氏的政策（1527-1597）」（中山大學碩士論文、2000）。
- 14 Kathlene Baldanza, "The Ambiguous Border: Early Modern Sino-Viet Relations" (Ph. D. dissertation,

- University of Pennsylvania, 2010); Brian Zottoli, “A History of Cochinchina” (Ph. D. Dissertation, University of Michigan, 2010).
- 15 Victor Lieberman, *Strange Parallels: Southeast Asia in Global Context, c.800-1830, Volume 1, Integration on the Mainland*. (Cambridge: Cambridge University Press, 2003), pp.7-23; J. D. Legge, “The Writing of Southeast Asian History”, in Nicholas Tarling ed., *The Cambridge History of Southeast Asia*, (Cambridge: Cambridge University Press, 1999), Vol. 1, Pt. 1, “From Early Times to c. 1500”, pp.1-32; Michael Arthur Aung-Thwin and Kenneth R. Hall, “Introduction”, in Michael Arthur Aung-Thwin and Kenneth R. Hall eds., *New Perspectives on the History and Historiography of Southeast Asia: Continuing Explorations*. (London: Routledge, 2011), pp.5-8.
- 16 [訳注] ここでセデスを「自律派」の一員として挙げている点は、監訳者個人としては疑問が残る。
- 17 Victor Lieberman, “Local Integration and Eurasian Analogies: Structuring Southeast Asian History, c. 1350-c. 1830”, *Modern Asian Studies* 27 (3), 1993 pp.557-558.
- 18 Lieberman, “Local Integration”, p.539.
- 19 この3篇の文章は以下の通り。Sun Laichen, “Military Technology Transfers from Ming China and the Emergence of Northern Mainland Southeast Asia”, *Journal of Southeast Asian Studies* 34(3), 2003, pp.495-517; Frédéric Mantiene, “The Transfer of Western Military Technology to Vietnam in the Late Eighteenth and Early Nineteenth Centuries: The Case of the Nguyen”, pp.519-534; Christopher E. Goscha, “Building Force: Asian Origins of Twenty-century Military Science in Vietnam (1905-1954)”, pp.535-560. 拙稿については李新平・邱普艶の中訳、「明代中国軍事技術的の伝播和東南亜北部大陸的の崛起 (1390-1527年)」があり、『中国東南亜研究会通説』1、2005、pp.27-39と、范宏貴主編『論説東南亜』（北京：民族出版社、2010）、pp.239-269に相次いで発表された。
- 20 Christopher Goscha, “Foreign Military Transfers in Mainland Southeast Asian Wars: Adaptations, Rejections and Change (Introduction)”, *Journal of Southeast Asian Studies* 34(3), 2003, pp.491-492.
- 21 Geoff Wade and Sun Laichen, eds., *Southeast Asia in the 15th Century: The China Factor* (Singapore: Singapore University Press; Hong Kong: Hong Kong University Press, 2010).
- 22 Eric Tagliacazzo and Wen-Chin Chang, eds., *Chinese Circulations: Capital, Commodities, and Networks in Southeast Asia* (Durham: Duke University Press, 2011).
- 23 Aung-Thwin and Hall, eds., *New Perspectives*, p.6. 彼らは主に以下の3篇の文章を指していると思われる。Sun Laichen, “Chinese-style Firearms in Southeast Asia: Focusing on Archaeological Evidence”, pp.75-111; Li Tana, “The Imported Book Trade and Confucian Learning in Seventeenth-and Eighteenth-century Vietnam”, pp.167-182; Keith Taylor, “Literacy in Early Seventeenth-century Northern Vietnam”, pp.183-198.
- 24 Liam C. Kelly, *Beyond the Bronze Pillars: Envoy Poetry and the Sino-Vietnamese Relationship* (Honolulu: University of Hawaii Press, 2005), pp.16-17.
- 25 “Chiao-chin and Neo-Confucianism: The Ming Attempt to Transform Vietnam”, *Ming Studies* 4, 1977, pp.51-91.
- 26 “The Rise of the Coast: Trade, State and Culture in Early Day Viet.” *Journal of Southeast Asian Studies* 37(1), 2006, pp.103-122.
- 27 Patricia M. Pelley, *Postcolonial Vietnam: New Histories of the National Past* (Durham: Duke University Press, 2002), pp.125-131.
- 28 陳重金著、戴可来訳『越南通史』（北京：商務印書館、1992）、p.3。

- 29 Keith W. Taylor, “China and Vietnam: Looking for a New Version of an Old Relationship”, in Jayne S. Werner and Luu Doan Huynh eds., *The Vietnam War: Vietnamese and American Perspectives*. (Armonk, New York: M. E. Sharpe, 1993), p.280.
- 30 潘輝黎等著、戴可來訳『越南民族歴史上の幾次戦略決戦』（北京：世界知識出版社、1980）；Keith Weller Taylor, *The Birth of Vietnam*. (Berkeley: University of California Press, 1983), p.xviii.
- 31 Taylor, “China and Vietnam”, p.283. Taylor, “The Vietnamese Civil War of 1955-1975 in Historical Perspective”, in Andrew Wiest and Michael Doidge eds., *Triumph Revisited: Historians Battle for the Vietnam War*. (New York: Routledge, 2010), pp.17-28.
- 32 Mark Moyar, *Triumph Forsaken: The Vietnam War, 1954-1965* (Cambridge: Cambridge University Press, 2009), p.xiii.
- 33 Bradley Camp Davis, “States of Banditry: The Nguyen Government, Bandit Rule, and the Culture of Power in the Post-Taiping China-Vietnam Borderlands” (Ph. D dissertation, University of Washington, 2008). The University of British Columbiaの博士課程学生であるAlexander Ongの博士論文のテーマも、17-18世紀の清朝とベトナムとの陸路の往来をめぐるものである。
- 34 Brantly Womack, *China and Vietnam: The Politics of Asymmetry* (Cambridge: Cambridge University Press, 2006); David Kang, *East Asia before the West: Five Centuries of Trade and Tribute* (New York: Columbia University Press, 2010). 後者の第一章の中の一節（5-8頁）のテーマが、“What history can tell us about today”である。
- 35 Sun Laichen, “Ming-Southeast Asian Overland Interactions, c. 1368-1644” (Ph. D. dissertation, University of Michigan, 2000).
- 36 孫宏年『清代中越宗藩關係研究』、pp.70-71；雲南省歴史研究所編『清実録越南緬甸泰國老撾史料摘抄』（昆明：雲南人民出版社、1985）、pp.295-296。
- 37 潘輝注『歷朝憲章類誌』（Saigon: Phu Quoc-Vu-Khanh Dac-Trach Van-hua xuất ban, 1972）、卷四、「輿地誌」、p.257。
- 38 1669年に李仙根が使節として安南に赴いた際、安南を「外国」、安南人を「外国人」と自ら言っている。『安南使事紀要』（『四庫存目叢書』、史部第56冊（台南：庄嚴文化事業有限公司、1996）、卷一、第十五葉（89頁）に掲載）を参照。
- 39 李仙根『安南使事紀要』、卷二、第八葉（93頁）。
- 40 孫宏年『清代中越宗藩關係研究』、pp.155-156；李光濤『記乾隆年平定安南之役』（台北「中央研究院」歴史語言研究所、1976）、pp.184-189；余定邦・喻常森『近代中国與東南亞關係史』（広州：中山大学出版社、1999）、p.59。
- 41 [訳注] この部分は原文がやや文意不明瞭だったため、著者に尋ねた際の回答を反映しているので、原文通りでは無い。
- 42 リーバーマンの*Strange Parallels: Southeast Asia in Global Context, c.800-1830, Volume 1, Integration on the Mainland*（ひとまず『形異神似：全球背景下的東南亞、約800-1830年』（卷一「東南亜大陸の整合」と訳す）(Cambridge: Cambridge University Press, 2003) の、東南アジアの歴史発展に影響を与えた要素についての全方位的な議論は、この方面の模範である。
- 43 朱惠榮校注『徐霞客游記校注』（昆明：雲南人民出版社）、上卷、「粵西游日記三」、p.520。
- 44 いずれも、劉文征『滇志』（昆明：雲南教育出版社、1991）、卷四、「旅途志」第二、p.171。
- 45 潘輝注『歷朝憲章類誌』、卷四、「輿地誌」、p.252。
- 46 Ngô Đức Thọ, Nguyễn Văn Nguyên, and Philippe Papin編（ハノイ：漢喃研究院、2003）、「高平省」、

- pp.679-700。
- 47 袁運福「略論越南歴史的莫朝」(鄭州大学1998年修士論文)、pp.12-14。
 - 48 張岳「與巡按兩司論交事」『皇明經世文編』卷194。(http://www.guoxue123.com/jijijibu/0201/00hmjswp/200.htm)に掲載。
 - 49 周維強「明代佛郎機銃研究」(台北：国立清華大学修士論文、1999)、pp.37-38。
 - 50 朱惠榮校注『徐霞客遊記校注』(昆明：雲南人民出版社、1999)、上卷、「粵西游日記三」、p.521。
 - 51 閔叙『粵述』(台北：藝文印書館、1967)、43b。牛軍凱が引用したベトナムの史籍、阮公宝『蘇江志始』、下巻、第75頁に同様の内容があるが、牛軍凱の手紙によると、『粵述』をもととしている。
 - 52 「平定三逆方略」(『欽定四庫全書』、史部)卷四十九、「丙寅」(1680年1月6日)条に記載。〔訳注〕黎維楨は黎熙宗(黎維裕)の対中国用の名前。
 - 53 詳細は、Sun Laichen, “Vietnamese Guns and China (c.1550-1680s)”, paper presented at Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, 2008を参照。
 - 54 大沢一雄「黎朝中期の明・清との関係(1527-1682)」、p.381。
 - 55 『大越史記全書』の大まかな統計による。陳重金『越南通史』、pp.213-220では、鄭阮紛争を、1627年、1630年、1643年、1648年、1655-1657年、1661年、1672年の7回の戦争とまとめている。
 - 56 『安南使事紀要』卷三、第9頁(105)。
 - 57 Olga Dror and K. W. Taylor, eds. *Views of Seventeenth-Century Vietnam: Christoforo Borri on Cochinchina and Samuel Baron on Tonkin* (Ithaca: Cornell University Southeast Asia Program Publications, 2006), pp.128-129.
 - 58 〔訳注〕いずれもlocalizationの中国語訳。本稿第1章では「地方化」を用いているが、著者によると、本地化や本土化の方がよいだろうとのことである。
 - 59 『東南亜学刊』16-17(1996)、pp.62-71に掲載。
 - 60 例えば、陳国棟「導言：近代早期亞洲の海洋貿易網絡」『東亜海域一千年』(台北：遠流出版公司、2005)、pp.7-44。
 - 61 孫来臣「中国東南亜研究述評」『南海研究』4、2010、p.98を参照。
 - 62 呉士連等『大越史記全書』、下冊、p.987。
 - 63 潘輝注『歷朝憲章類誌』、卷4、「輿地志」、p.258。
 - 64 和田博徳「阮朝中期の清との関係(一八四〇—一八八五)」山本達郎編『ベトナム中国関係史』(山川出版社、1975)、pp.553-559。
 - 65 黄枝連『天朝礼治体系研究』中巻、「東亞的礼儀世界—中国封建王朝与朝鮮半島關係形態論」(北京：中国人民大学出版社、1994)、p.268；黄枝連『天朝礼治体系研究』下巻、「朝鮮的儒化情境構造朝鮮王朝与滿清王朝的關係形態論」(北京：中国人民大学出版社、1995)、pp.29-77。
 - 66 1882年、嗣徳帝が、まさにフランスに浸食されつつあるベトナムを、清朝がなかなか救援に来ないのを恨んで言った、「而下国自以遼遠、不得例于高麗近属」という言葉が、ベトナムと朝鮮とを比べた場合に、地理的な距離があるということを反映していよう。引用文は、鄭永常：「嗣徳帝の最後挣扎：1880-1883年中越秘密接触」許文堂主編『越南、中国與“台湾”關係的転変』(台北：中央研究院東南亞研究区域計画、2001)、p.51を参照。
 - 67 Alexander Ong Eng Ann, “Contextualising the Book-Burning Episode during the Ming Invasion and Occupation of Vietnam”, in Wade and Sun, eds., *Southeast Asia in the Fifteenth Century*, pp.154-165を参照されたい。
 - 68 全海宗『中韓關係史論集』、p.161。

- 69 全海宗『中韓関係史論集』、pp.131, 133。
- 70 黄枝連『天朝礼治体系研究』中巻、p.404, 559。
- 71 『大越史記全書』上巻、p.93；『邦交好話』（Lâm Giang và Nguyễn Công Việt (chủ biên)、*Ngô Thì Nhậm Toàn tập* (Hà Nội: Nxb KHXH, 2005), tập 3、pp.629, 631) に掲載。
- 72 Alexander L. Vuving, “Operated by World Views and Interfaced by World Orders: Traditional and Modern Sino-Vietnamese Relations”, In Reid and Zheng, *Negotiating Asymmetry*, p.81.
- 73 鄭永常「嗣德帝的最後掙扎」、pp.48, 56。
- 74 陳重金『越南通史』、p.196。
- 75 孫来臣：『論緬中（外中）關係史的研究（一）——以中国对早期緬甸的“影響”為中心』『亞太研究論叢』3、2006、pp.201-233；孫来臣『論“緬甸關係史”的研究』『中国東南亞研究会通訊』2、2005、pp.1-16。
- 76 Zhang Feng, “Rethinking the ‘Tribute System’”；陳志剛『關於封貢体系研究的幾個理論問題』。
- 77 何芳川「“華夷秩序”論」『何芳川教授史学論文集』（北京：北京大学出版社、2007）、pp.215-216を参照。
- 78 黄枝連『天朝礼治体系研究』上巻、pp.253, 305-306, 358-359；中巻、pp.294-295, 404, 495, 553, 558。
- 79 [訳注] 黎玄宗（黎維禰）の对中国用の名前。
- 80 『清実録越南緬甸泰国老撾史料摘抄』、p.9。
- 81 孫宏年『清代中越宗藩關係研究』、p.392。
- 82 この方面に関する基本となる研究として、Thongchai Winichakul, *Siam Mapped: A History of the Geography of a Nation* (Hawaii: University of Hawaii Press, 1994) を参照されたい。
- 83 『朱文公熹奏札』、清朝汝霖撰、伍新福校点『楚南苗誌』（長沙：岳麓書社、2008）、pp.90-94（引用文は93頁）に掲載。
- 84 黎崱『安南志略』（北京：中華書局、1995）、巻15、「物産」、p.361。
- 85 范宏貴主編『農智高研究資料集』（南寧：广西民族出版社、2005）第五部分、「有關農智高的論文」を参照。
- 86 [訳注] 阮光平は西山朝の皇帝阮文恵（阮文恵）の清朝向けの名前。ここで著者は基本的に阮光平を使用しているので、本訳稿もこれに従う。
- 87 龍永行『論中越歴史的宗藩問題—兼駁河内史家的種種謬說』（<http://www.sky.yn.gov.cn/content.aspx?id=580827329152>）；孫宏年『清代中越宗藩關係研究』、p.36。
- 88 李光涛『記乾隆年平定安南之役』、pp.224-227；張明富「乾隆末安南国阮光平入華朝覲假冒說考」『歷史研究』3、2010、pp.60-67。
- 89 例として、梁志明「關於中国東南亞学研究的幾個問題」北京大学東南亞研究中心編『中国東南亞研究：動態與發展趨勢』（香港：香港社会科学出版社有限公司、2007）、p.11に掲げる「東南アジアを研究する中国の学者は引き続き「ヨーロッパ中心論」を排除すると同時に、「中国中心主義」の傾向も注意深く避け克服する必要がある」；張錫鎮「近年来中国東南亞教学及学科建设考察」同上、p.29の「自覚なく中国中心論をヨーロッパ中心論の替わりにしてはならない」。
- 90 陳重金『越南通史』、p.47。
- 91 鄭永常『征戰與棄守—明代中越關係研究』、pp.4-6。
- 92 拙著“Chinese Gunpowder Technology and Dai Viet: c. 1390-1497”, in Nhung Tuyết Trần & Anthony Reid, ed., *Viet Nam: Borderless Histories* (Madison, Wisconsin: University of Wisconsin Press), pp.72-120を参照。
- 93 陳重金『越南通史』、pp.188-220。
- 94 拙著、中島楽章訳、「東部アジアにおける火器の時代：1390-1683」『九州大学東洋史論集』34、2006、

pp.3-4。

- 95 張岳「與巡按兩司論交事」『皇明經世文編』卷194に記載。
- 96 チャン・チョン・キム (p.235) は、鄭氏がこの時期、北方で少しも功績を挙げられなかったのは、彼らが北方の莫氏と南方の阮氏とを同時に討伐し対抗せざるをえなかったからである、と論評している。Taylor (“Literacy”, pp.184, 191-192) も、何年も続く征戦で、ベトナム社会は武を重んじ文を軽んじ、若者は筆を捨てて従軍するようになり、その結果教育水準は低下し、文学の教科書は減少した、と指摘している。
- 97 黎貴惇『大越通史』(Saigon: Bo Van Hoa Giao Duc va Thanh Nien, 1973)、32b-39a。
- 98 鄭永常『征戦與棄守－明代中越関係研究』、p.183。
- 99 『邦交好話』、pp.483-484。牛軍凱が引用した「修于偽莫之科」の「修」の字は写し間違いのはずで、「儕」と改めると筋が通るだろう。
- 100 余定邦・喻常森『近代中国与東南亜関係史』(広州：中山大学出版社、1999)、p.44；孫宏年『清代中越宗藩関係研究』、pp.36-37；陳重金『越南通史』、pp.282-283。
- 101 許文堂「十九世紀清越外交関係之演變」許文堂主編『越南、中国與“台湾”關係の轉變』、pp.90-91に掲載。
- 102 竹田龍児「阮朝初期の清との関係 (一八〇二—一八七〇年)」山本達郎編『ベトナム中国関係史』(山川出版社、1975年)、538-544頁；Alexander Barton Woodside, *Vietnam and Chinese Model: A Comparative Study of Vietnamese and Chinese Government in the First Half of the Nineteenth Century* (Cambridge: The Council on East Asian Studies, Harvard University, 1988)、pp.234-261；劉仁善「19世紀的越中関係と朝貢制度：理想與現実」(http://chinese.historyfoundation.or.kr/Data/Jnah/J6_1_A3_chin.pdf)；濱下武志『近代中国的國際契機』(北京：中国社会科学出版社、1999)、pp.38, 42；Vuving, “Operated by World Views”, pp.78-83；全海宗『中韓関係史論集』の158頁で、建州は同時に明朝と朝鮮に朝貢し「二重朝貢関係」となった、と述べている。
- 103 桃木至朗『中世大越国家の成立と変容』(大阪：大阪大学出版会、2011)、pp.191-194。[訳注]『大越史記全書』洪徳16年 (1485) 11月21日条 (陳荊和校合本p.726)。
- 104 Woodside, *Vietnam and Chinese Model*, pp.18-22。
- 105 李焯然「越南史籍對“中国”及“華夷”觀念的詮釈」『復旦学报』2、2008、pp.10-18。
- 106 Vuving, “Operated by Views”, p.82。
- 107 許文堂「十九世紀清越外交関係之演變」、pp.93-94。
- 108 Takashi Inoguchi, “China’s Intervention in Vietnam and its Aftermath (1786-1802): Re-examination of the Historical East Asian World Order”, in I Yuan, ed., *Rethinking New International Order in East Asia: U.S., China and Taiwan* (Taipei: Institute of International Relations, 2005), 361-403. 本稿ではネット版 (<http://www.iir.nccu.edu.tw/chinapolitics/rethinking/12.doc>) より引用した。